柏原市遺跡群発掘調査概報

―芝山古墳群・大県遺跡―

１９８６年度

１９８７年３月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市は市域の70%を山間部が占め、今なお緑が多く残り、大和川、石川の豊かな水の流れと相まって、自然環境に満ちた街となっています。また大阪市街から15kmたらず、交通至便であることから大阪のベッドタウンとして、あるいは自然を求めて人々が移り住み、人口の社会増の主要因となっています。人口の増加とともに住宅等の数も増え、平野部だけでなく、山間部にもその波は押しよせようとしています。

しかし自然を求めようとしているはずであるのに、大きな建設機械で木々をなぎ倒し、山肌を削り、瞬時に景観を一変させてしまう光景は、逆に自然を追いつめようとしているかのようにも見えます。「衣・食・住」の3要素の中で「住」の向上、追求が昨今最も強く叫ばれています。しかし豊かな「住環境」の追求とはそういう行為をいうのではありません。過去からありのままの姿で伝えられてきた環境、自然をうまく取り入れ、自身がとけこんで一体化してこそ成り立つものです。そしてその環境、自然、文化遺産を私たちがなくすことなく継承し、再び未来へ伝える。この選択こそが「今」だけでなく「未来」をも考えた、よりよい「住環境」づくりの基本的姿勢であり、また私たちが負った責任、義務でありましょう。

豊かな環境、自然、文化遺産に恵まれたこの柏原の地が、鉄とコンクリートの街と化さず、いつまでも東山、明神山一帯が緑でおおわれていることを願っています。

末筆ではありますが今回の調査にあたり発掘届出者をはじめとする関係各位に感謝しますと共に、今後も文化財保護を通じての自然環境保護に対する尚一層の御理解、御協力をたまわりますようお願いする次第です。

1987年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1．本書は、柏原市教育委員会が昭和61年度に原因者負担事業として実施した発掘調査のうち、芝山古墳群86－1次調査、大県遺跡86－6次調査、同86－7次調査、同86－8次調査の発掘調査概要報告書である。

2．発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課　竹下賢、石田成年が、整理、本書の執筆は石田が担当した。

3．調査に要した諸費用は、それぞれの依頼者の負担による。

4．調査の実施にあたり、下記の諸氏の参加、協力があった。

石田　博　　北野　重　　安村俊史　　桑野一幸　　谷口京子　　寺川　款
秋田大介　　稲岡利彦　　清瀧健二　　井上岩治郎　奥野　清　　奥野義夫
谷口鉄治　　分才春信　　道簱甚蔵　　森口喜信　　乃一敏恵　　横関勢津子
吉居豊子　　竹下真紀　　岡西万里子　　（順不同・敬称略）

5．本書に使用した標高は、T．P、方位は注記のないかぎり磁北である。

目　　次

はしがき
例　　言
目　　次

第1章　芝山古墳群……1

第2章　大県遺跡……5
Ⅰ　86－6次調査……6
Ⅱ　86－7次調査……15
Ⅲ　86－8次調査……22

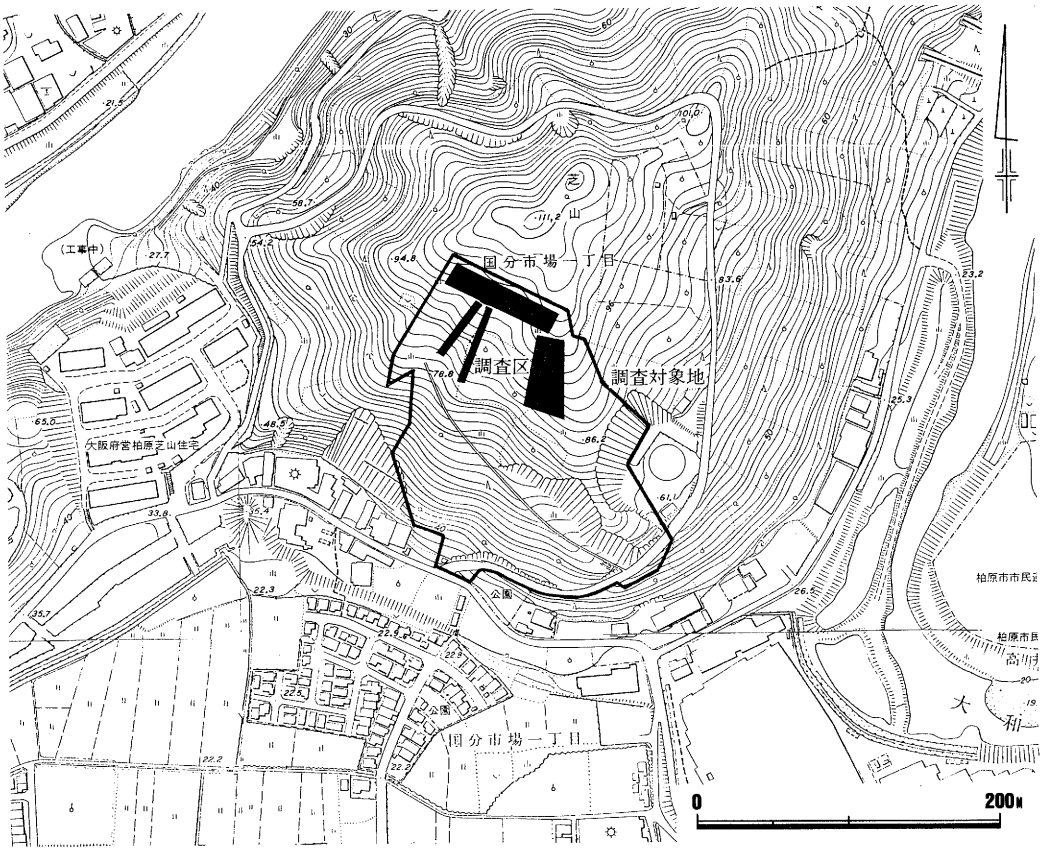
第1章　芝山古墳群

86－1次調査

- 調査地所在地　　柏原市国分市場1丁目3140　他
- 調査期間　　1986年4月7日～5月7日
- 調査面積　　2230／28277㎡
- 調査担当者　　竹下　賢

調査概要

学校法人玉手山学園（理事長　江端文行）は、柏原市国分市場1丁目に学校建設を計画した。芝山の東側斜面地には後期の古墳群が発見されており、当該地一帯もそれらの範疇としてとらえられ、芝山古墳群内に含まれている。また前期古墳の葺石、石室用材に使用されている安山岩が当該地産であることも指摘されており、生産遺跡としての性格も加味されるものである。



図－1　調査地位置図（方位は真北）

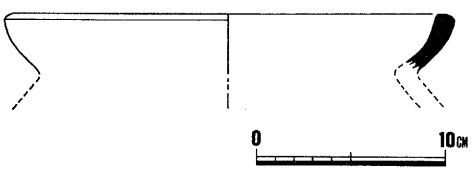
柏原市教育委員会では、学校建設予定地全域に対し調査の必要を認め、学園側との協議を経て、1982年５月31日から６月11日まで、まず試掘調査を実施した。調査は幅２ｍのトレンチを８ヶ所設定し（総延長270m）、表土層を重機により、その下層及び断面を人力により掘削した。その結果、調査対象地全域に土砂採土及び果樹園のための削平による旧地形の著しい変化がみられた。しかし、現地表に古墳築造に充分機能しうる石材が散逸していること、芝山の持つ歴史的環境等を勘案し、対象地北半について発掘調査を実施することとした。発掘調査は1986年４月７日から５月７日まで実施し、試掘調査と同様、表土層を重機により、その下層及び断面を人力により掘削する方法をとった。なお調査に要した諸費用は、依頼者である学校法人玉手山学園の負担による。

Ａ区は対象地の北端に設定した、東西75m、南北17mの調査区である。基本的には上から、表土、赤灰色土、赤灰色安山岩質霞乱土（地山）の層序となる。現地表下20～60cmで地山に達する。遺構、遺物は認められなかった。調査区内において地質的に相違がみられ、Ａ1区、Ａ2区西半では地山は赤灰色を呈するのに対し、Ａ２区東半、谷より東では黄白色を呈する。この傾向は、後述するＢ区、Ｃ区でも同様で、対象地の西にあるＢ区の地山は赤灰色を呈し、東にあるＣ区では黄白色を呈している。

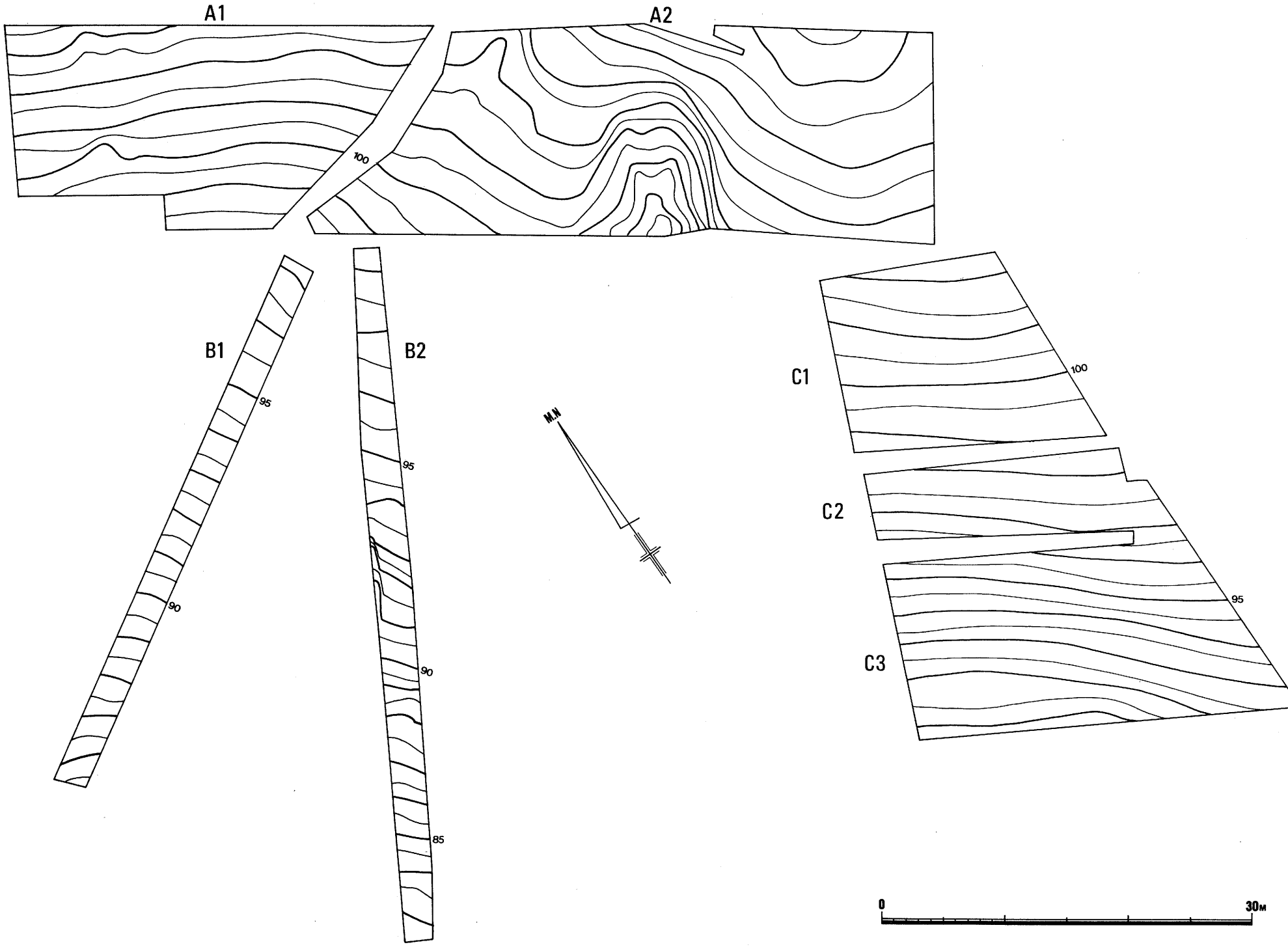
Ｂ区はＡ区の南に設定した２本のトレンチである。Ｂ１区は幅2.5m、長さ46m。Ｂ２区は幅2.5m、長さ56m。当初、２本のトレンチに狭まれた区域を掘削する予定であったが、Ａ区の掘削状況から遺構の存在する可能性が低いと判断し、トレンチによる調査に変更した。Ｂ区においても遺構、遺物は認められなかった。現地表下50～70cmで地山に達する。南半において果樹園による旧地形の改変が著しい。

Ｃ区はＡ区の東端から南にむかって延びる尾根の南西斜面に設定した東西30m、南北38mの調査区である。Ｂ区に比して傾斜が緩やかであることから全域掘削した。現地表下20～40cmで地山に達し、遺構、遺物は認められなかった。

以上のように、調査地内に古墳が存在する可能性は極めて低いと判断された。しかし現地の石垣に多量の花崗岩が使用されていることから、破壊を受けているとも想起できる。また付近の古老の談によると、石垣を積んだ塚のようなものがあったとのことである。調査地周辺を踏査したが確認はできなかった。図示したものも含めて遺物を３点表採した。いずれも中世以降の所産とみられ、当該地はすでにその時期に旧地形の改変を受けていると考えられる。

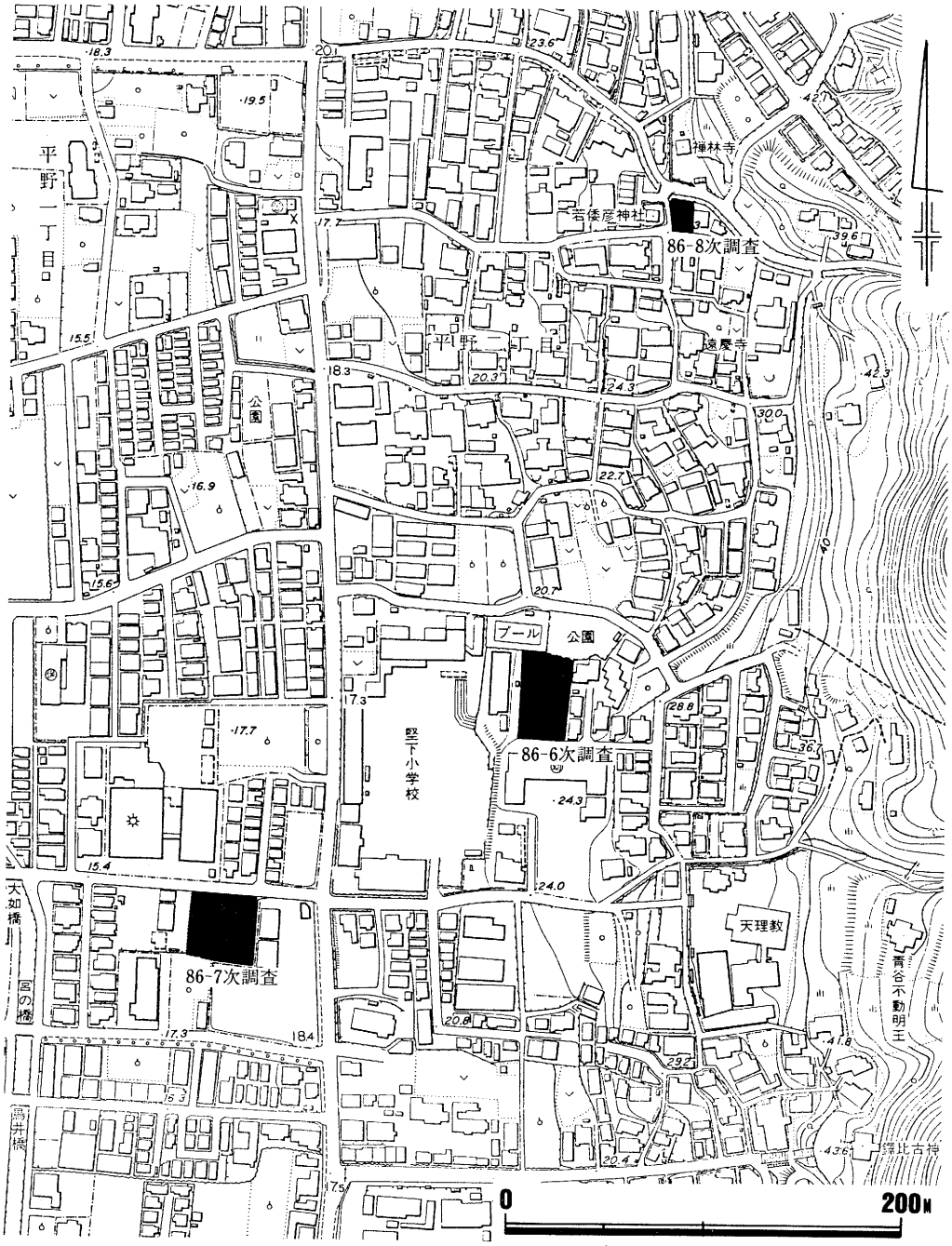


図－２　出土遺物



図－3　調　査　区　地　形　図

第2章　大　県　遺　跡



図－4　調査地位置図（方位は真北）

I　86－6次調査

- 調査地所在地　　柏原市平野2丁目185
- 調査期間　　1986年7月9日～7月17日
- 調査面積　　100／984㎡
- 調査担当者　　石田成年

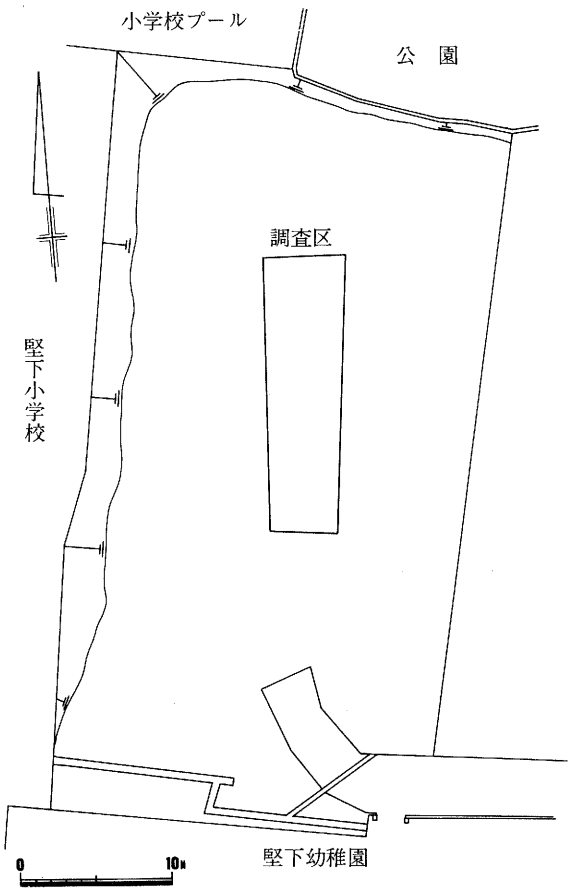
1．調査に至る経過

乾木材住宅株式会社は、柏原市平野2丁目185に分譲住宅建設を計画した。教育委員会ではまず1986年4月30日に試掘調査を実施し、遺物包含層を現地表下約60cmに確認した。その結果、調査対象地の中央を南北に走る道路予定地において、発掘調査が必要と判断し、同年7月9日から17日まで調査を実施した。調査により、奈良時代の柱列、井戸、縄文土器を含む溝等を検出した。なお、調査に要した諸費用は、依頼者である乾木材住宅株式会社の負担による。

2．位置と環境

高尾山（標高277.8m）から西にむかってのびる尾根が扇状地に突き出て、その傾斜をゆるやかにした所に調査地は位置する。標高は約23m。南に堅下幼稚園、西に堅下小学校が隣接する。

当該遺跡では、炉、輔羽口、鉄滓等、鍛冶関係の遺構、遺物の検出が多くあることから、6世紀代におけるその専門集団居留の中心地と理解されている。また、河内六寺の一つである大里寺の寺域が、堅下小学校の南を中心として推定されており、1984年1月の下水道管埋設に伴なう発掘調査で「大里寺」と記された墨書土器の出土により、その位置が決定づけられるものとなった。



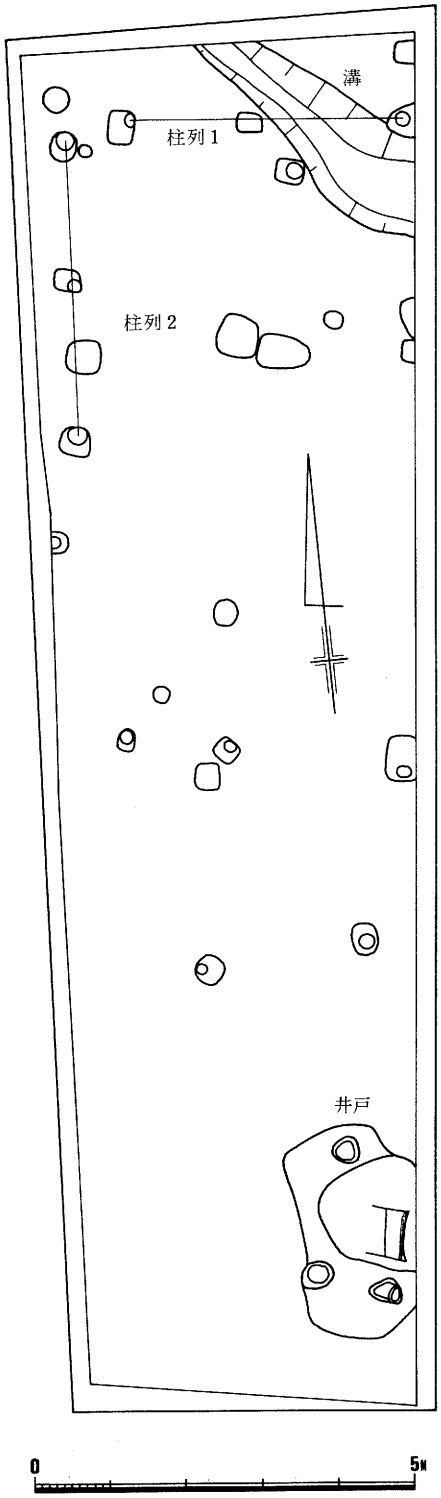
図－5　調査区位置図

3．遺構

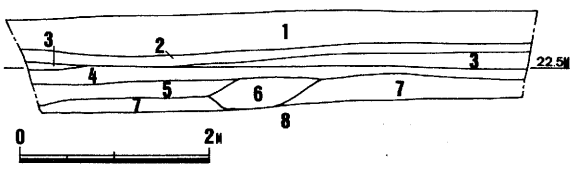
調査は、道路予定地に5.5m ×18.0m の調査区を設定し、黄灰褐色粘質土（第４層）までを重機により掘削し、以下を人力により掘削、精査した。基本層序は、上から、盛土、灰褐色砂質土、茶灰色砂質土、黄灰褐色粘質土、黒褐色砂質土、茶灰褐色土、褐色砂礫土の順である。

主な遺構として柱列、井戸、溝を検出した。

柱列１は調査区の北辺で検出した東西方向の柱列である。２間分検出した。柱間は東から、2.0m、1.6m を測る。主軸は磁北に対し、N－83°－Wである。検出面からの柱穴の深さは東から、17cm、19cm、16cmを、掘形は一辺40cm、32cm、44cmを測る。調査区が狭小であった為、この柱列が東西方向に延びることも予測できる。柱列２は調査区の西北隅で検出した、柱列１に直交する南北方向の柱列である。２間分検出した。柱間は南から2.0m、1.9 m を測る。主軸は磁北に対し、N－3°－E である。検出面からの柱穴の深さは南から、14cm、22cm、23cmを測る。この柱列は北へ延びるとも考えられる。調査区内においては、他に約20個の柱穴を検出した。しかし、柱列も含めて現存の深さが浅いことから、当該地は大きく削平を受けているとみられ、それにより失なわれた柱穴も多くあると思われる。



図－６　遺構平面図

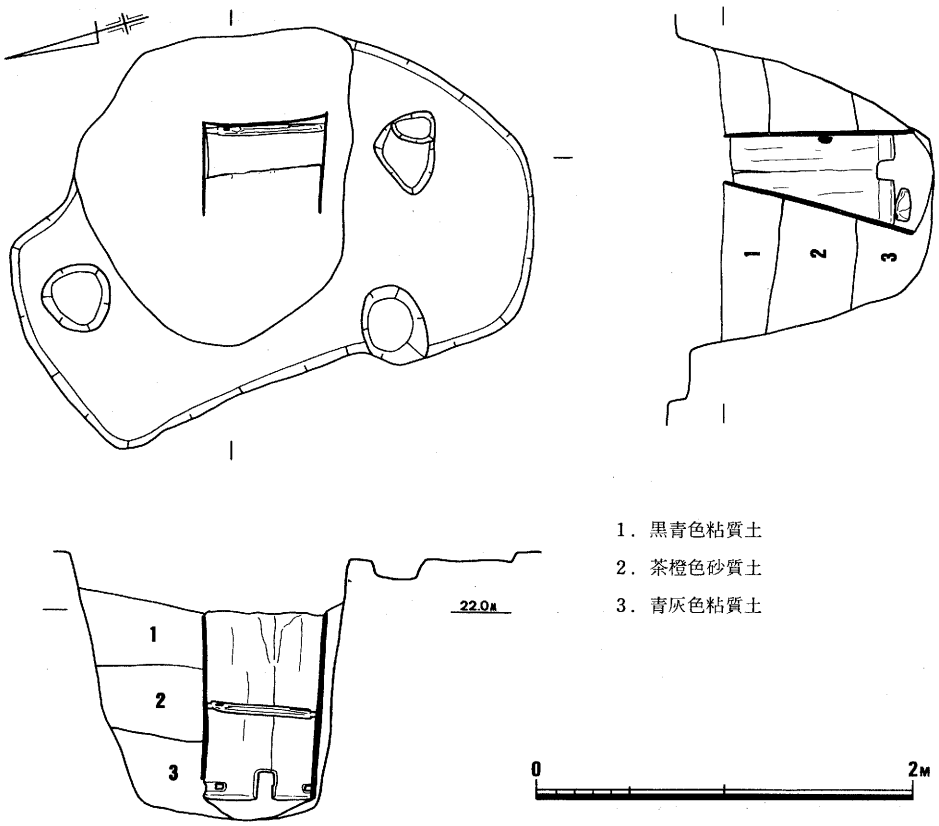


１．盛土
２．灰褐色砂質土
３．茶灰色砂質土
４．黄灰褐色粘質土
５．黒褐色砂質土
６．黒褐色砂礫土(溝埋土)
７．茶灰褐色土
８．褐色砂礫土

図－７　北壁断面土層図

井戸は調査区の東南隅で検出した。掘形は不整円形で、東西160cm、南北145cmを測る。深さは現状で140cmである。断面は擂鉢状を呈する。掘形の中央南寄り、ほぼ掘形南壁に接して井戸枠をおく。井戸枠は方形で縦板組である。平面の内法一辺は50～65cmを測る。側板は四面とも一枚板で、東西の側板を南北の側板ではさみ込んで組み合わせている。検出時、西側板は裏込めの土圧によるものか、内側へ大きく傾いていた。横桟は東側板に接するもののみ遺存していた。対面する側板のどちらか一方の側面には、横桟の枘と組み合いそうな枘穴らしきくり込みがある。しかし井戸内から用材らしき木材の出土がなかった為、それぞれを結合する横桟の存否は不明である。井戸枠下端固定の為か、北側板西側下部に、径約20cmの石を１点置く。井戸枠内、掘形埋土から奈良時代の遺物の出土があった。土器類、井戸枠、横桟等、個々の遺物については後述する。

溝は調査区の東北隅で検出した。地形、溝底部の勾配の状況から、西北方向へ流れる溝である。検出面での最大幅は130cm、深さは50cmを測る。黒褐色砂礫土を埋土とする。埋土中から縄文土器片、石鏃、布留式土器片の出土があった。出土土器、土層から察するに、その機能していた期間は長きにわたるようである。しかし遅くとも奈良時代には廃絶していたとみられる。



図－8　井戸

4．遺物

遺物として、縄文土器、石器、弥生土器、須恵器、土師器、金属製品、木製品等がある。そのうち井戸内出土の土器類、金属製品、木製品と溝出土の縄文土器、石鏃のみ図示した。遺構検出面に至るまでの遺物包含層からも遺物の出土があったが、細片ばかりであり、図化にたえうる良好なものがない為、図示していない。

1は須恵器の鉢。口径26.7cm、器高14.8cm。灰色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。体部は心持ち内弯し、頸部で屈曲した後、斜め上方に伸びる。口縁は肥厚し、端部は平らである。4は土師器の堝。口縁は大きく外反し、端部は若干丸みを持つ。体部最大径のところに三角形の把手が付く。淡茶橙色を呈し、胎土、焼成とも良好である。1～4は井戸枠内上層からの出土である。7は土師器の鉢。内面に2段の放射状暗文を施す。上段は左上がり、下段は右上がりである。5～7は井戸枠内下層からの出土である。10は土師器の皿。口径24.0cm、器高2.5cmを測る。口縁端部は内側に巻き込む。端部外側に1条の凹線がめぐる。底部は中央で凹む。外面底部をヘラ削りし、他はナデる。内面は螺旋状暗文と放射状暗文を施す。12は土師器甕。井戸内出土の土器中、唯一完形のものである。口径18.7cm、器高16.5cm、最大径19.2cmを測る。口縁は外反し、端部は外へ屈曲する。内面はナデ調整を基本とし、一部板ナデ痕が残る。外面の調整もナデを基本とする。粘土継目が顕著に残り、指頭圧痕によりその表面は凹凸が著しい。8～12は井戸枠内最下層、底部からの出土である。13は須恵器の、14は土師器の杯である。底部、高台部のみ残す。13～15は井戸掘形埋土からの出土である。

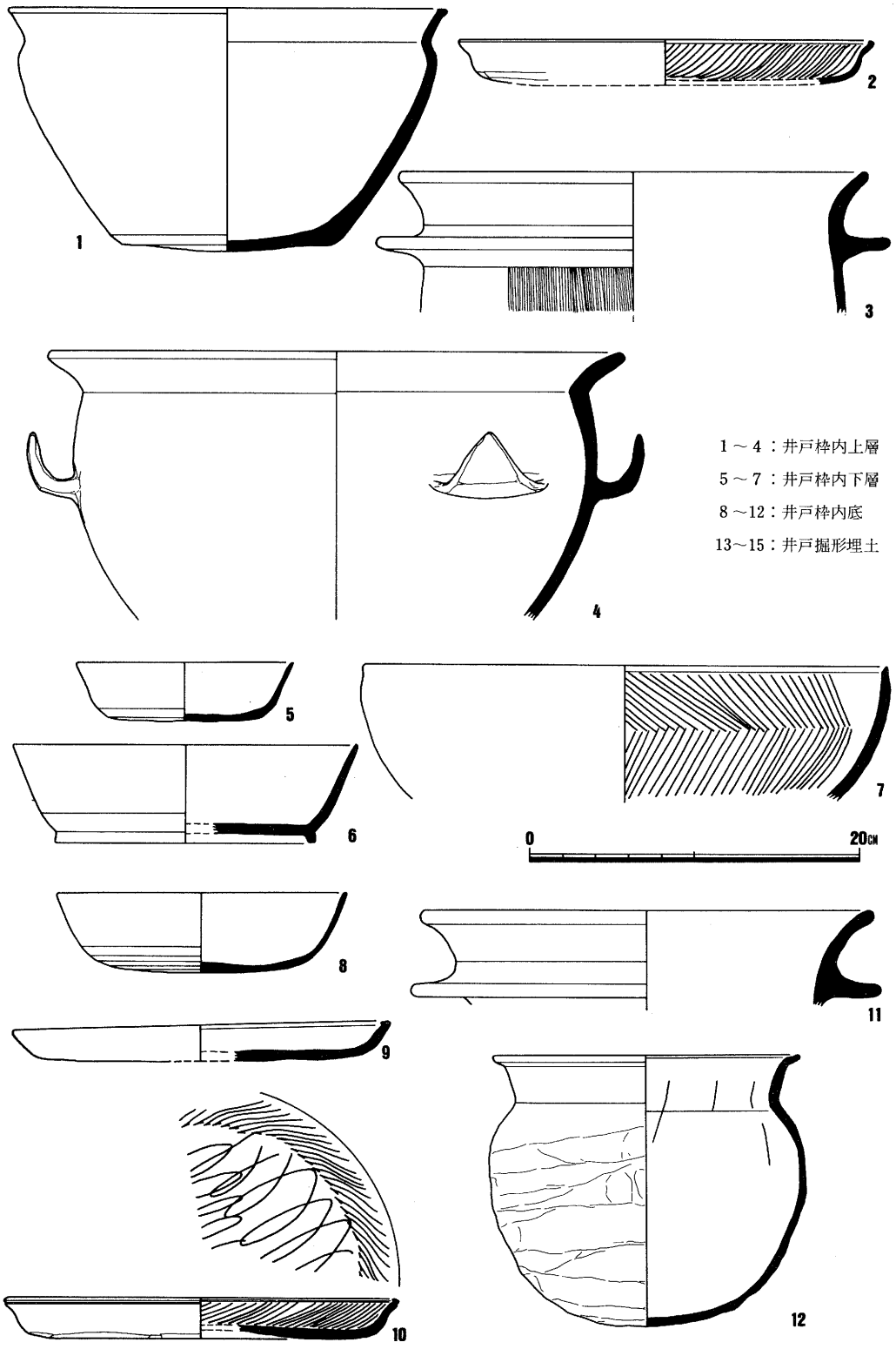
墨書土器は井戸枠内下層から出土した。土師器の皿の外面底部、中心から外寄りの位置に、外から内にむかって「井門家」と明確に記されている。「井」の上部には文字はないと思われる。この墨書土器1点をもって、当該地の性格を決定づけるにはいささか危険も伴うが、大里寺の寺域が当該地より南にいくらか距離を隔てていること、「家」の持つ意味等を勘案した場合、井戸に関係した何らかの施設や機関の存在を想定できよう。今後の検討課題としたい。

帯金具は井戸枠内上層から出土した。一辺1.8cmで先端は丸い。厚さは6.5mm。3本の鋲足を有する。裏金の表裏両面に施漆痕がわずかに残る。銅製で赤茶色を呈する。

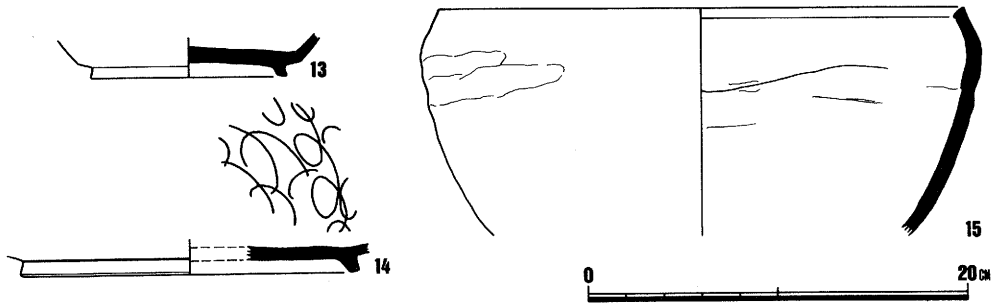
井戸出土の土器は8世紀中頃から後半の所産とみられる。

溝出土の遺物として、縄文土器2片、石鏃1点を図示した。

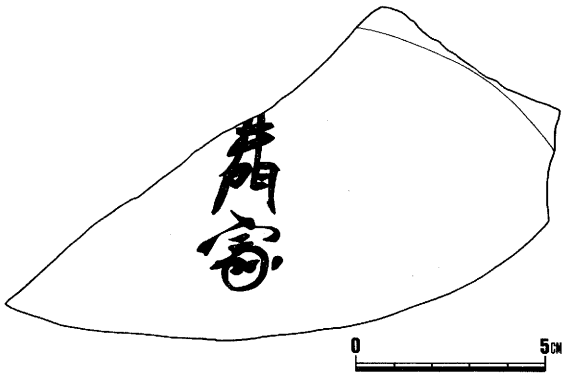
1は口縁からやや下った箇所に刻目凸帯を有する。色調は茶灰色を呈する。2は口縁端部に刻目凸帯を有する。色調は褐色。両者とも深鉢であろう。3はサヌカイト製の無茎式石鏃。長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmを測る。重量は1.83g。いずれも縄文晩期のものとみられる。


1
2
3
4
1～4：井戸枠内上層
5～7：井戸枠内下層
8～12：井戸枠内底
13～15：井戸掘形埋土
5
6
7
0
20cm
8
9
10
11
12

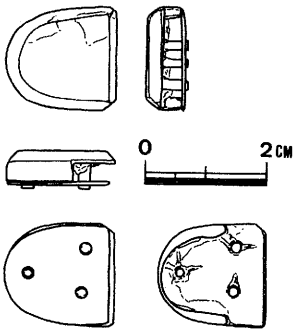
図－9　井戸出土遺物（1）



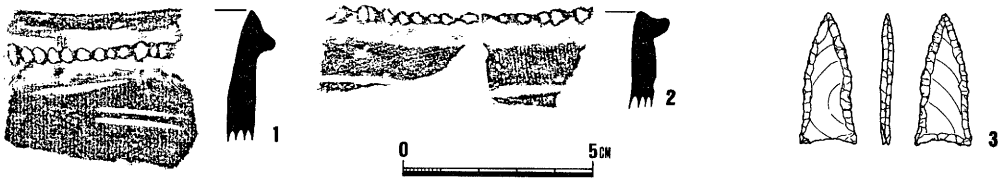
図－10　井戸出土遺物（２）



図－11　井戸出土墨書土器



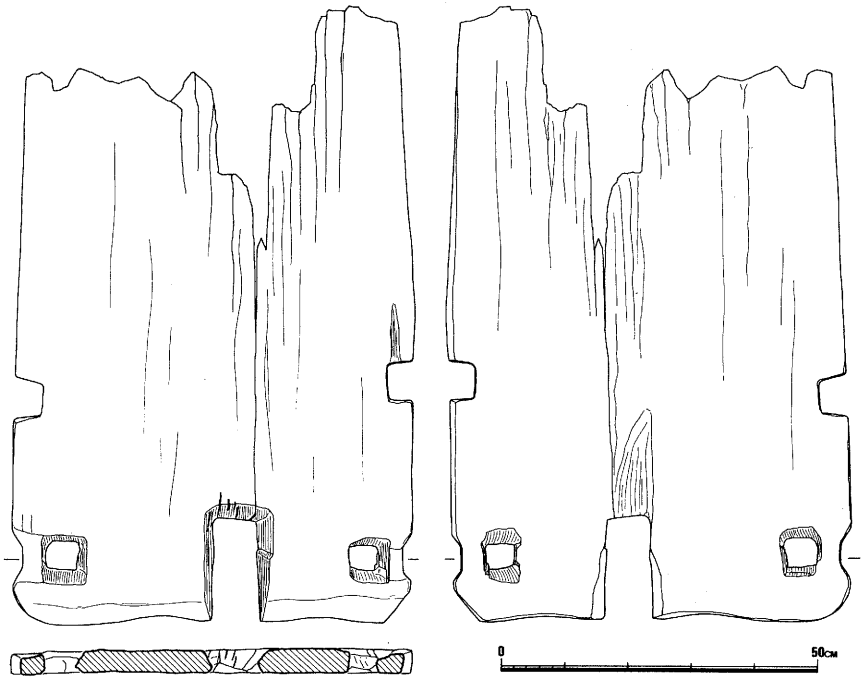
図－12　井戸出土帯金具



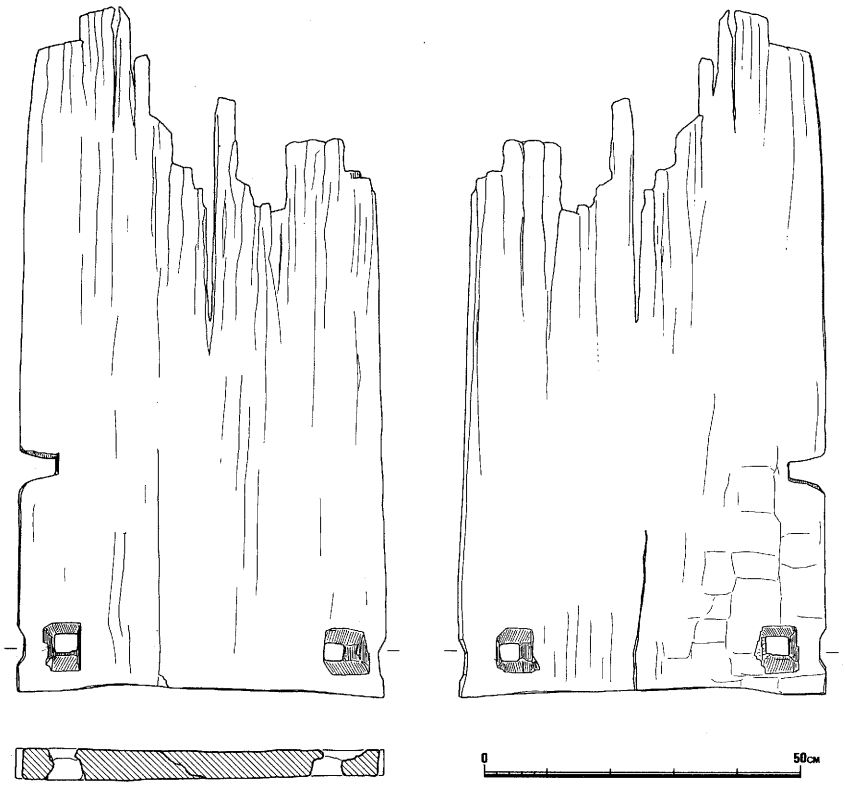
図－13　溝出土遺物

井戸枠には板材４枚、横桟１本が使用されている。板材には基本的には中央両側に刳り込み、下端両側に２つの穿孔、下端中央に刳り込みが施される。記述にあたっては東側のものを井戸枠１、以下南から順に２、３、４とし、井戸の内側の面を表面、外側を裏面とした。

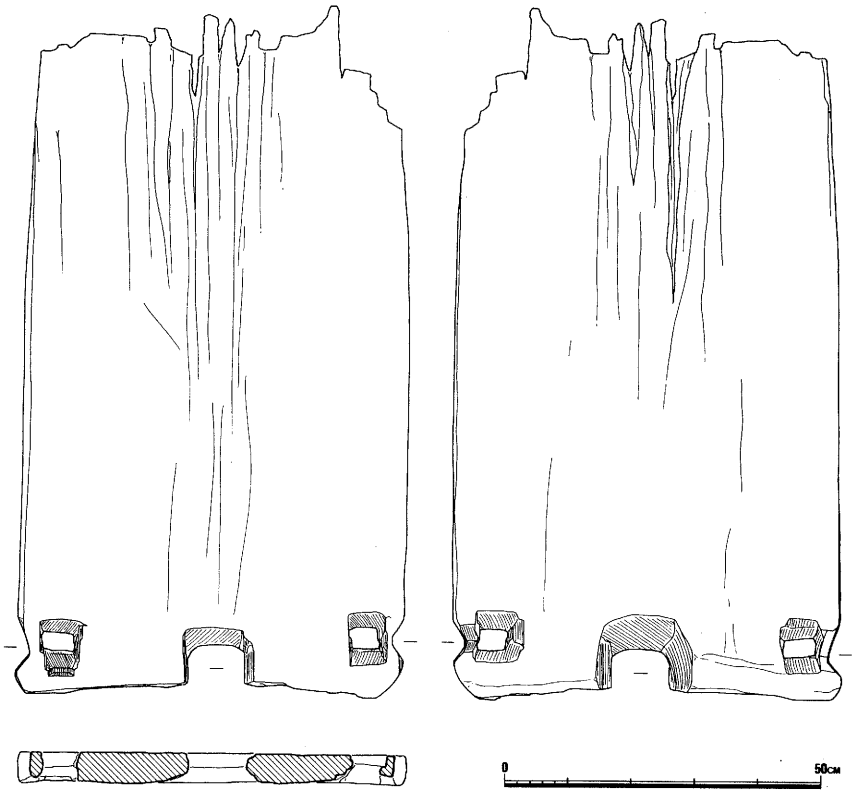
井戸枠１は高さ97cm、幅63cm、厚さ４cmを測る。両側に横桟を受けるのか一辺約５cmの刳り込みがある。下端両側には一辺約５cmの穴が穿たれる。また下端中央は高さ16cm、幅７cmの大きさで大きく刳られている。下端部は表面側を面取りする。表面、裏面、下端も滑らかに仕上げる。井戸枠２は高さ108cm、幅57cm、厚さ４cmを測る。表面にむかって左側にのみ刳り込みがある。下端両側の穿孔は一辺３cm。他の３枚にある下端中央の刳り込みはこの板材にはない。



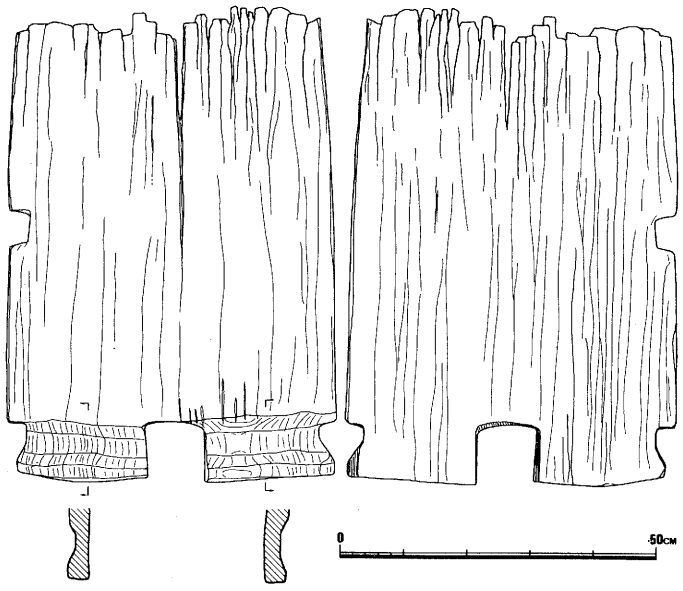
図—14　井戸枠 1



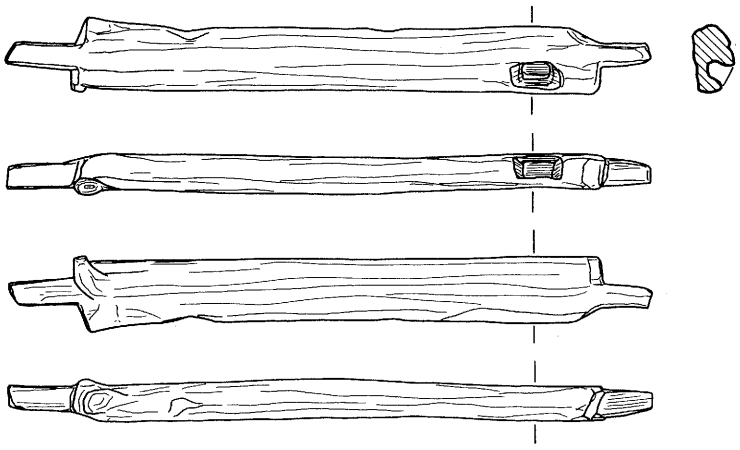
図—15　井戸枠 2



図—16　井戸枠 3



図—17　井戸枠 4



図－18　横桟（１：８）

裏面右下には手斧であろうか幅７～５cmの調整痕が明瞭に残る。井戸枠３は高さ109cm、幅61cm、厚さ５cm。両側の刳り込みはこの板材にはない。下端中央の刳り込みは高さ６cm、幅９cmとやや小さい。裏面下端部を面取りする。井戸枠４は高さ75cm、幅52cm、厚さ3.5cmと４枚の中で極端に小さい。表面むかって左側にのみ刳り込みがある。下端両側の穿孔はない。表面下部に幅８cm、深さ１cmの横方向の溝状加工が施されている。下端中央の刳り込みは一辺９cmである。

横桟は長さ68cm、直径７cmの棒状でその左右両端は加工されて枘状を呈する。右端に近いところに縦３cm、横５cm、深さ2.5cmの穴があく。貫通はしない。

板材については上端は腐触し形態がやや損なわれているものの全体的に比較的良好な遺存状況であった。

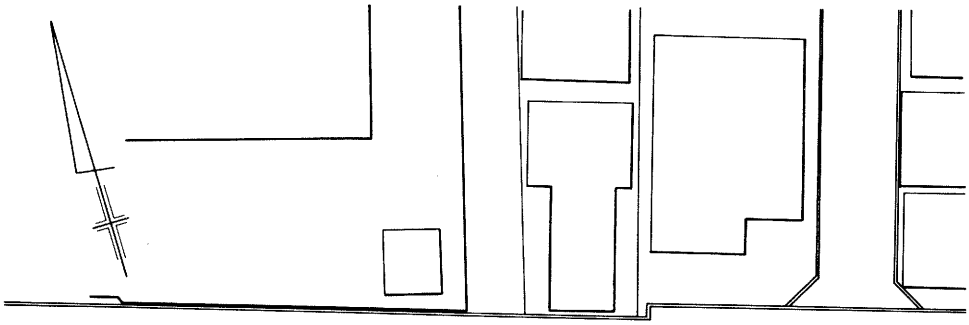
当該地において、奈良時代の柱列、井戸、縄文土器を含む溝を検出した。より注目されるのは奈良時代の遺構であろう。しかし、その性格、規模を明らかにすることはできなかった。当該遺跡内には家々が建ち並び、旧地形の改変が著しくみられる。当該地も影響を受けていることは前述した。しかしわずかながらも生活面の痕跡が認められたことは一つの大きな成果であった。今後も当該地周辺で調査は実施されよう。それにより遺跡の性格、歴史の流れの中での動き、人々の足跡がより明らかになるよう、慎重な対応を心がけていきたい。

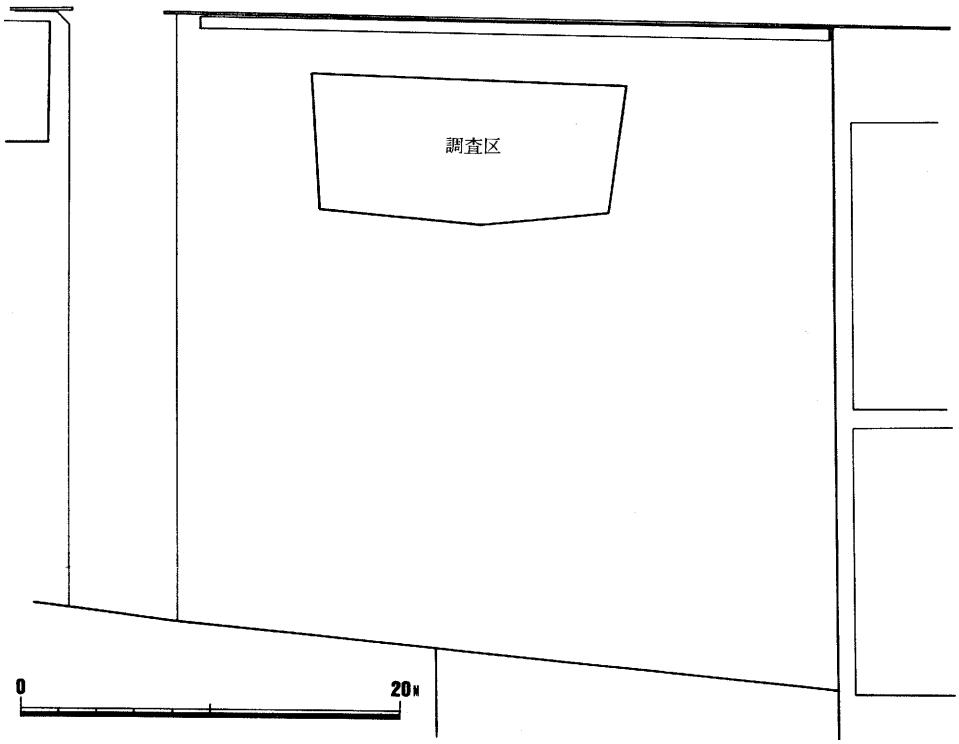
Ⅱ　86－7次調査

- 調査地所在地　　柏原市平野1－12－1
- 調査期間　　1986年8月18日～8月26日
- 調査面積　　116／1213㎡
- 調査担当者　　石田成年

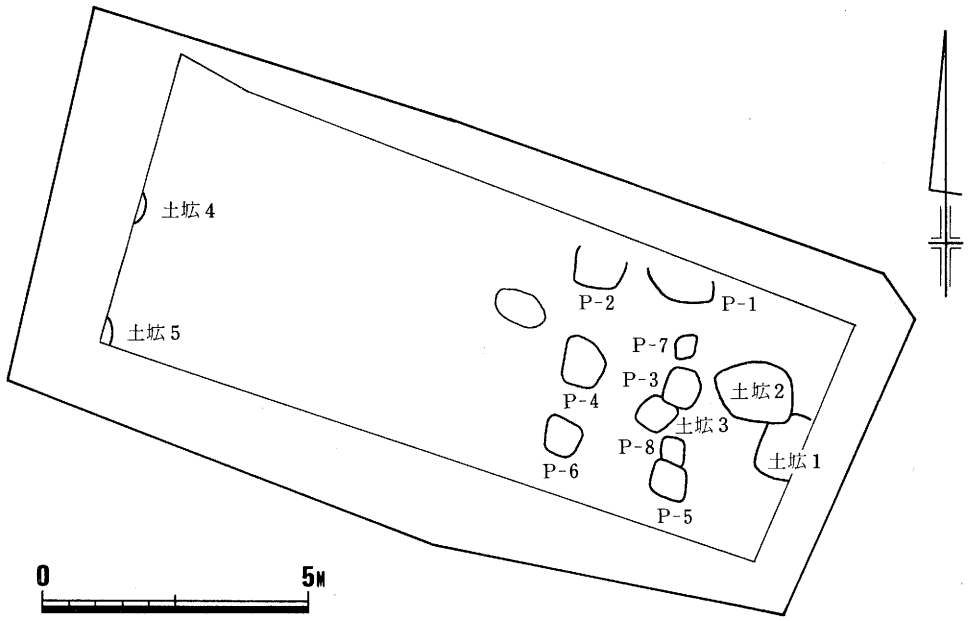
1．調査に至る経過

柏原市平野1丁目においてマンション建築の計画があり、当教育委員会が調査依頼を受け、まず、1986年4月23日に試掘調査を実施した。その結果、現地表下1.7mに遺物包含層を確認





図－19　調査区位置図



図—20　遺構平面図

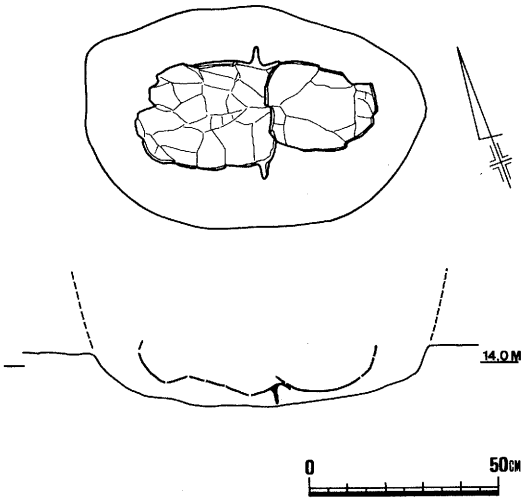
した。教育委員会では調査の必要を認め、数度の協議を経た後、1986年８月18日から26日まで浄化槽部分について発掘調査を実施した。調査は対象地の北辺に東西16.5m、南北７m の調査区を設定し、茶青灰色砂質粘質土（第７層）までを重機により、以下、現地表下3.3m まで人力により掘削した。調査に際しては湧水があり、特に第７層と灰青色粘質土（第16層）で著しく、壁の一部が崩落するなど危険が伴ない難渋した。なお、調査に要した諸費用は依頼者である本田武三氏の負担による。

2．遺構

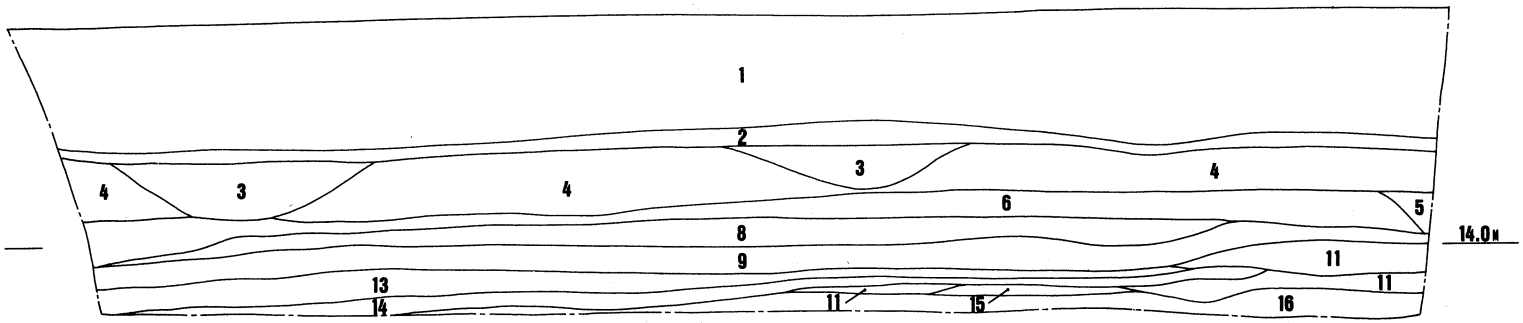
当該地は地形的には生駒山地南端西麓の小規模な谷口扇状地の中央部西寄りに位置する。東に東高野街道（旧国道170号線）、西に恩智川が平行して走る。標高は約16m 。

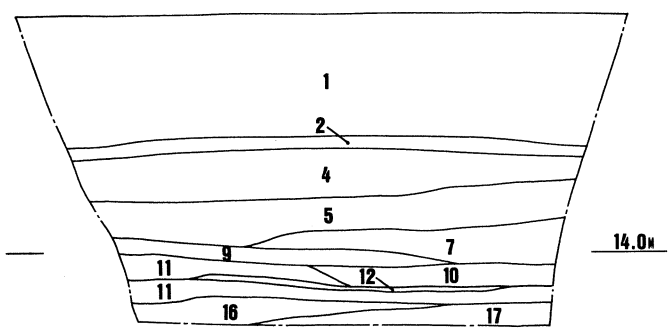
遺構として、柱列、土壙などがある。

柱列は調査区の東半で茶灰色砂土を掘削後、検出した。整然とした並びではないが、東西１間（柱間1.9m）、南北２間（1.8m）以上の建物になるかと思われる。削平を受けているのか、現存の深さは20～30cm を測



図—21　土器棺





1．盛土
2．黒灰色粘質土(旧表土)
3．黒緑灰色土
4．青灰色粘質土
5．黒青灰色粘質土
6．茶褐色粘質土
7．茶青灰色砂質粘質土
8．灰褐色砂質土
9．茶灰色砂礫土
10．灰色砂土
11．茶灰色砂土
12．灰色細砂質土
13．青灰色粘質土
14．緑灰色粘質土
15．緑灰色細砂土
16．灰青色粘質土
17．黒青灰色粘質土

図—22　調査区東壁・北壁断面土層図

るのみである。掘形の一辺は約60cm。主軸は磁北に対してN－9°－Wを示す。土壙は5基検出した。土壙2は東西1.5m、南北1.1mを測る。検出面から約1mばかり掘り下げたが、湧水の為、底は検出できなかった。他の土壙と比較して湧水が特に著しく、より深いことから、井戸として機能していたかもしれない。各土壙からは7世紀後半とみられる土器が出土している。調査区のほぼ中央で、茶灰色砂礫土（第9層）を穿つ土器棺を検出した。東西90cm、南北60cmの楕円形の掘形内に土釜と口縁を欠く甕を組み合わせて、横位に据え置いたものである。上半は削平によるものか失なわれており、土器内に副葬品、人骨等も認められなかった。掘形も現状では深さ15cmを測るのみであるが、土器の大きさから本来40cm程度の深さをもつと思われる。

3．遺物

1～14までは遺構検出面より上層の遺物包含層から出土した。6世紀中頃を上限として、幅広い時期の土器の出土があった。14は移動式竈の釜口の部分。釜口端部外側に同心円文の圧痕が残る。外面はハケ、内面はナデ調整、色調は明茶褐色。この形態は柏原市内遺跡では現在までに10点近く出土している。15～17は茶灰色砂礫土（第9層）、18～23は青灰色粘質土（第13層）、24、25は緑灰色粘質土（第14層）からの出土で、それぞれ遺構に伴うものではない。

26～29は土壙2から出土した。27は高杯の脚部。やや角ばった杯に外へ大きく広がる脚が付く。28、29は土釜。29の内面には板ナデ調整痕が残る。

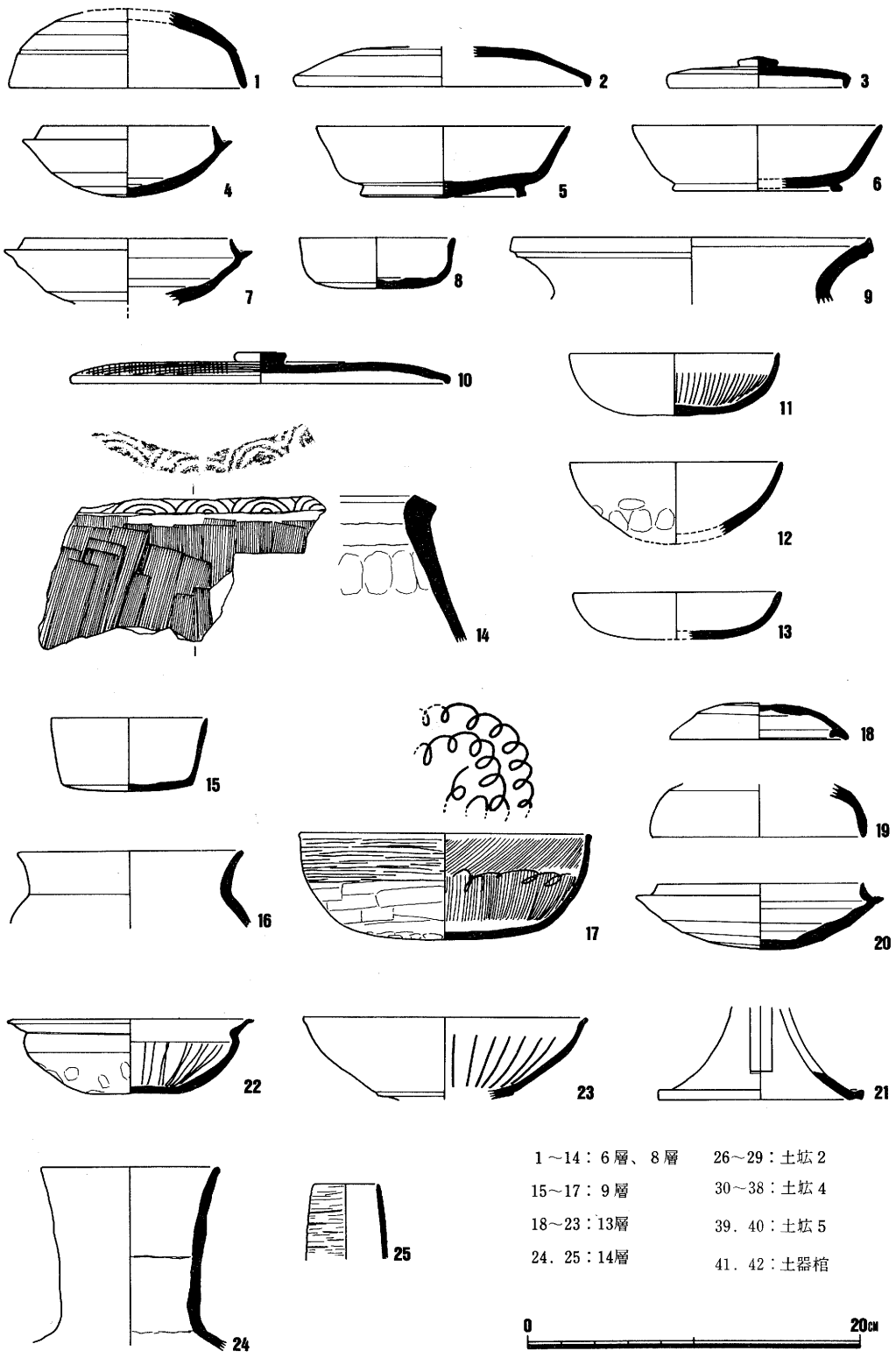
30～38は土壙4から出土した。30はかえりを有する宝珠つまみ付きの須恵器杯蓋。蓋上部⅓をヘラケズリ、他をナデで仕上げる。32、33は土師器杯。内面に2段の放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。外面上部はヘラミガキ、下部はヘラ削り調整である。径高指数（器高／口径×100）はそれぞれ36、40である。37は把手付塊。口縁端部は肥厚し、大きく外反する。

39、40は土壙5から出土した。40は土師器杯。内面下部½に放射状暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。外面下部½には指頭圧痕が顕著に残る。

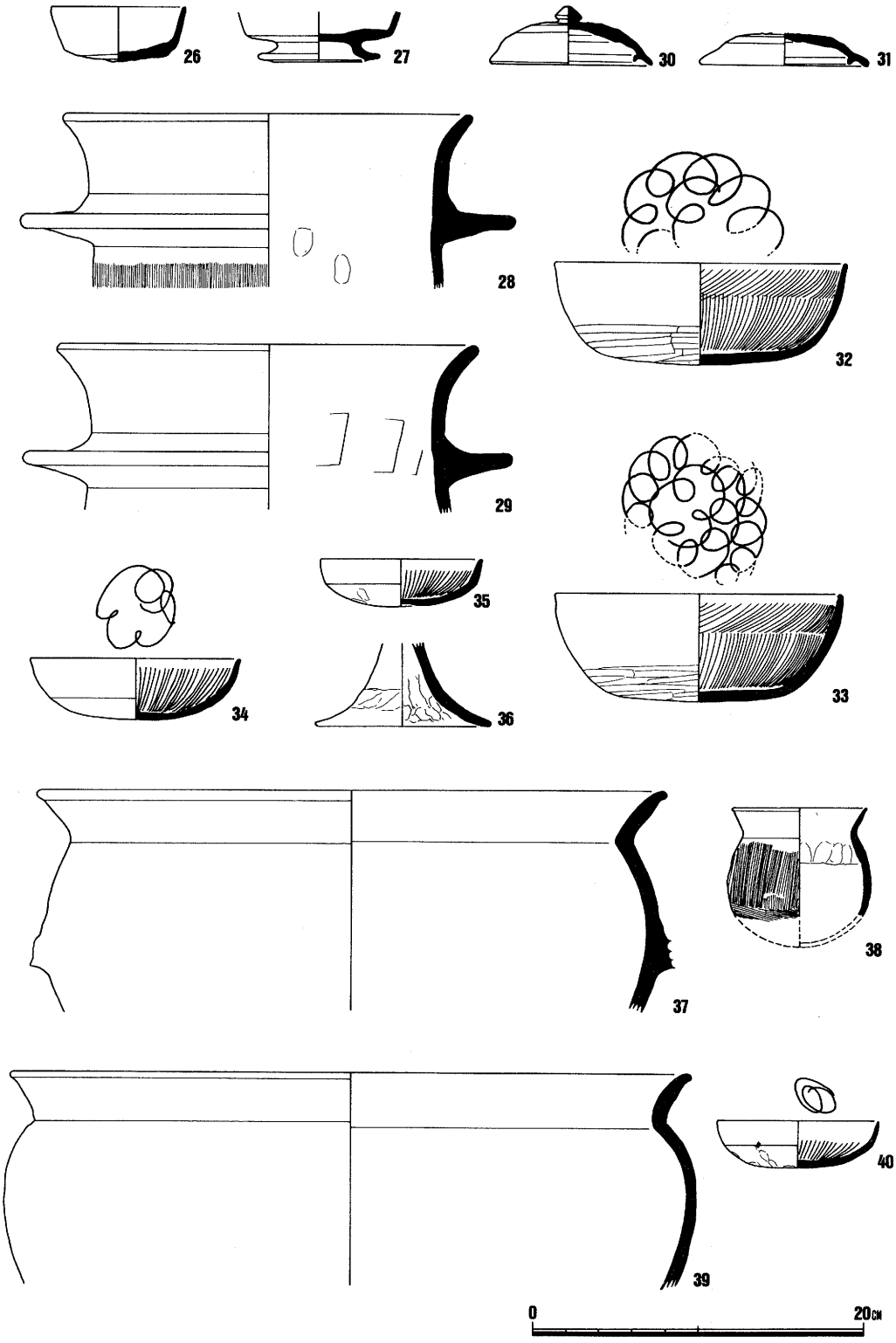
41、42は土器棺に使用されていたもの。41は甕。口縁部を欠く。意図的なものであろうか。体部は楕円形で最大径は25cmを測る。色調は明茶色、焼成は良好、胎土はやや粗い。調整は外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケ後、タテ方向にナデる。ナデ痕が顕著に残る。42は土釜。砲弾形の体部をもつ。口径26.4cm、鍔径33.0cm、最大胴径26.1cm、器高38.6cmを測る。色調は褐色である。外面は基本的にタテハケ、内面はナデと指押エ。圧痕が明瞭に残る。

土壙出土の遺物は7世紀中頃から後半、土器棺は8世紀前半頃の所産とみられる。

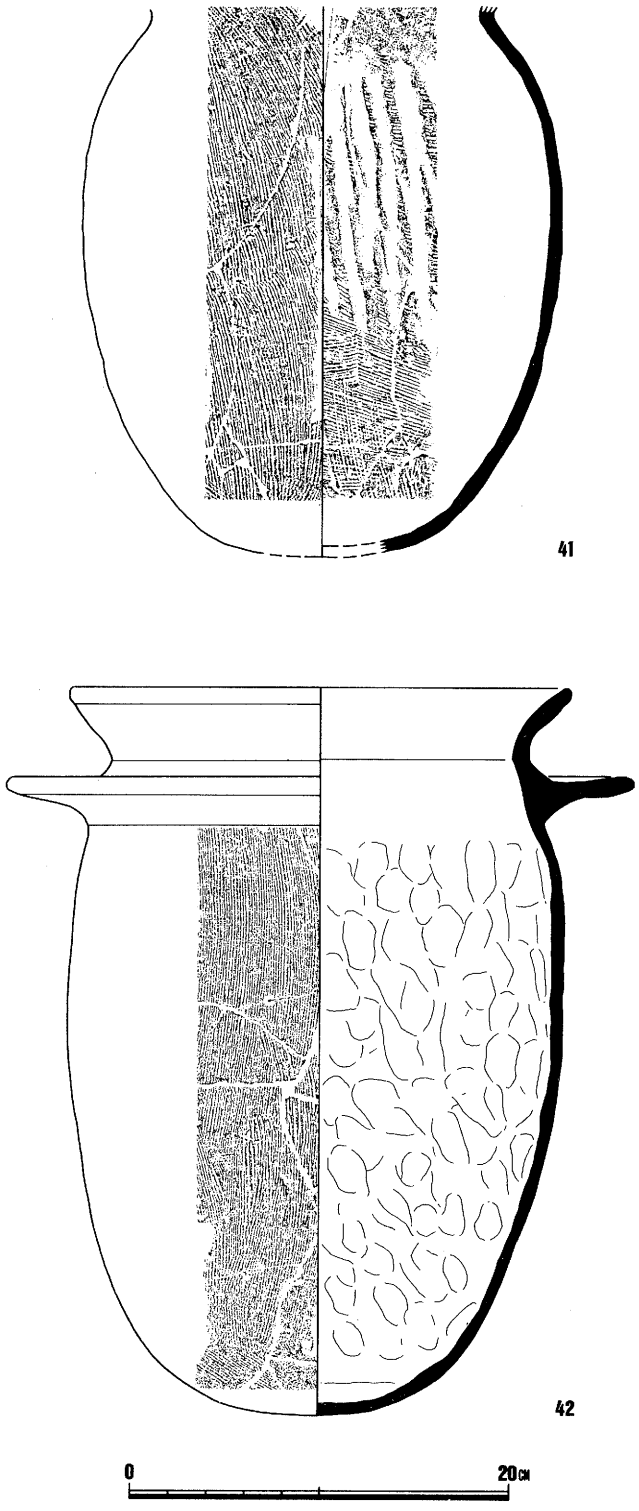
東高野街道と恩智川にはさまれた南北に長い一帯は、東高野街道以東と比較して、調査回数、面積共に少ない。遺構面まで深いこと、湧水が著しいことなど自然条件の面で制約が多く、調査の実施に困難が伴うからである。しかし今回の調査で7～8世紀の生活面の存在が明らかとなった。悪条件の中でそれに対応できる調査方法の考慮と、その慎重な実施の必要を痛感した。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
1～14：6層、8層
15～17：9層
18～23：13層
24．25：14層
26～29：土坑2
30～38：土坑4
39．40：土坑5
41．42：土器棺
0
20cm

図－23　出土遺物（1）



図－24　出土遺物（２）



図－25　出土遺物（３）

Ⅲ　86－8次調査

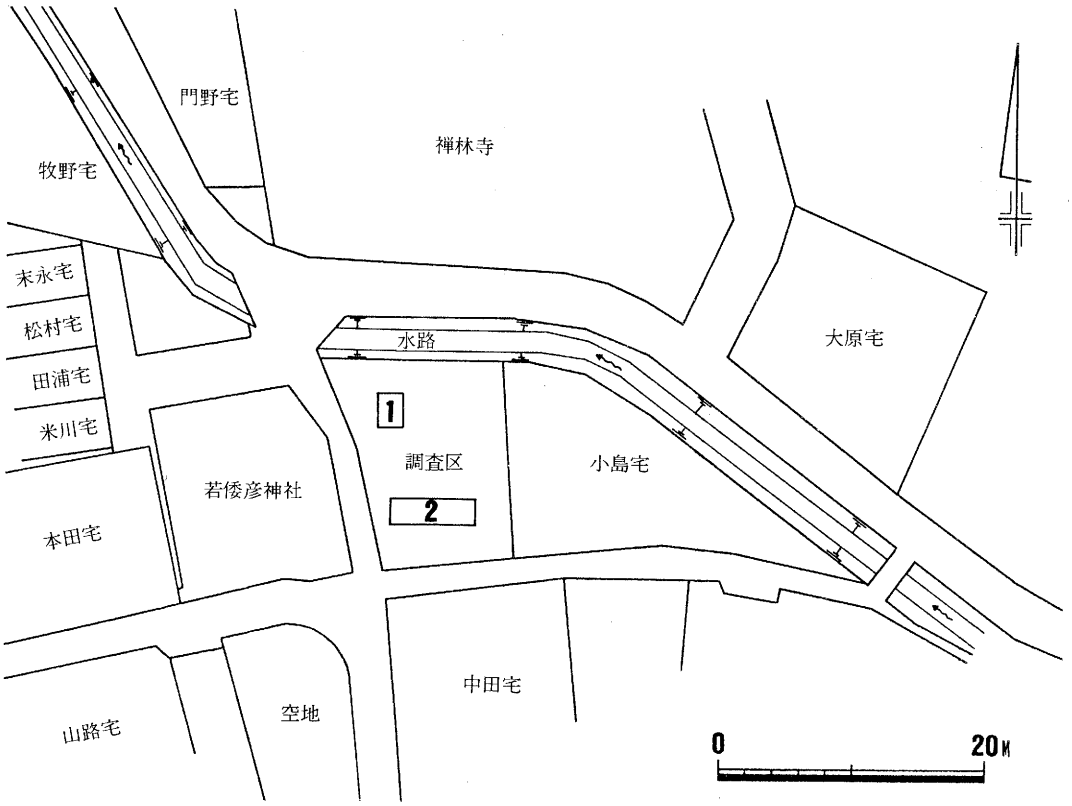
- 調査地所在地　　柏原市平野2丁目10—23
- 調査期間　　1986年12月1日～12月3日
- 調査面積　　20／229㎡
- 調査担当者　　石田成年

調査概要

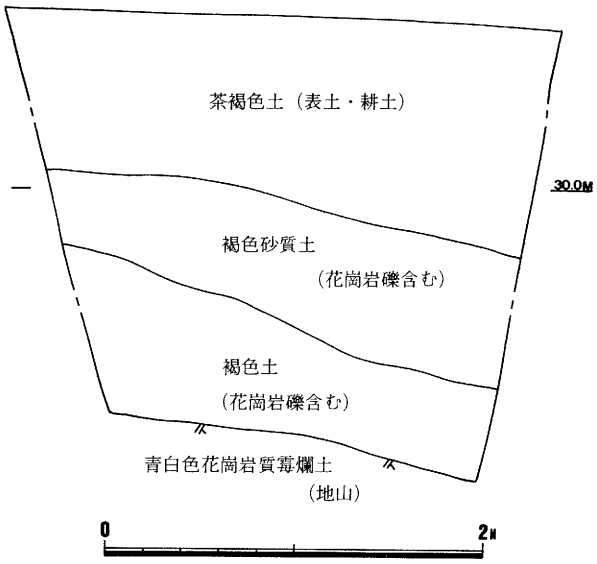
国陽開発株式会社は柏原市平野2丁目に分譲住宅建設を計画し、発掘届出書を当市教育委員会に提出した。教育委員会では協議後、調査依頼をもとに発掘調査を実施した。

当該地は高尾山から西に派生した尾根の西北斜面、標高約31mにある。東に86－5次調査地、西に平野地区の産土神である若倭彦神社がそれぞれ隣接する。

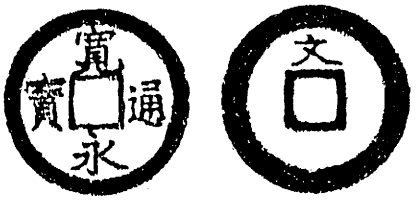
調査は、調査対象地の西北隅に2×3m（1区）、南に7×2m（2区）の調査区を設定し、人力掘削により実施した。2区では現地表下約30cmで地山に達した。近世以前の遺物、遺構は認められなかった。1区は上から茶褐色土（表土・耕土）、褐色砂質土、褐色土、地山の順で、遺構は認められなかった。第2層、第3層には花崗岩礫を含んでいる。遺物は何れの層からも



図—26　調査地周辺図



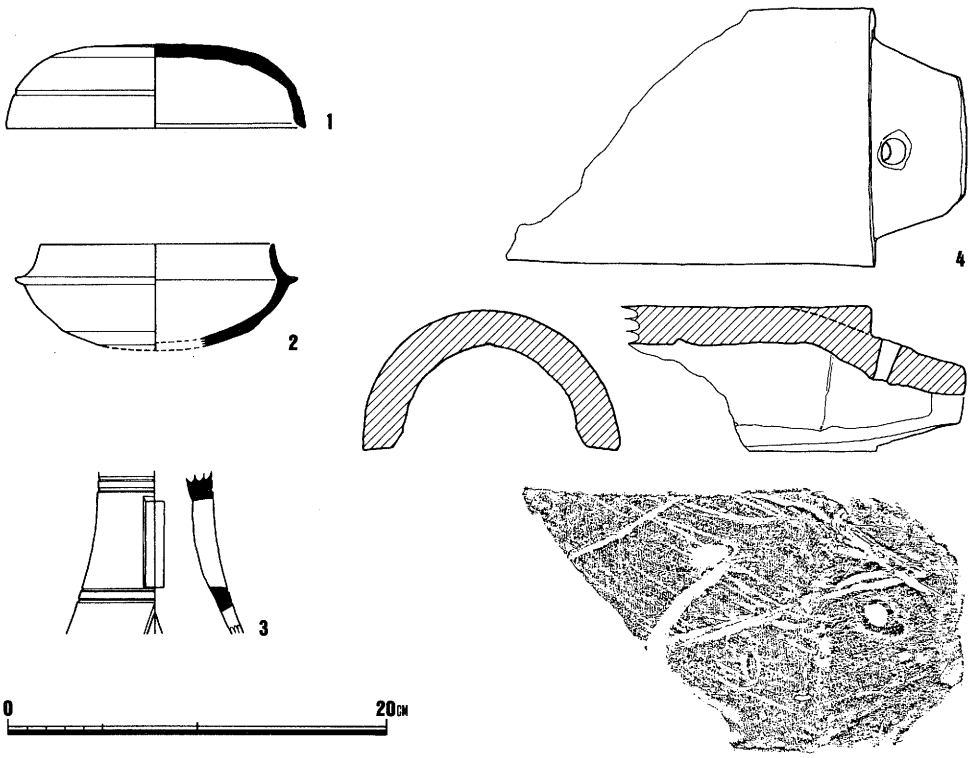
図—27　1区西壁断面土層図



図—28　出土銅銭（1：1）

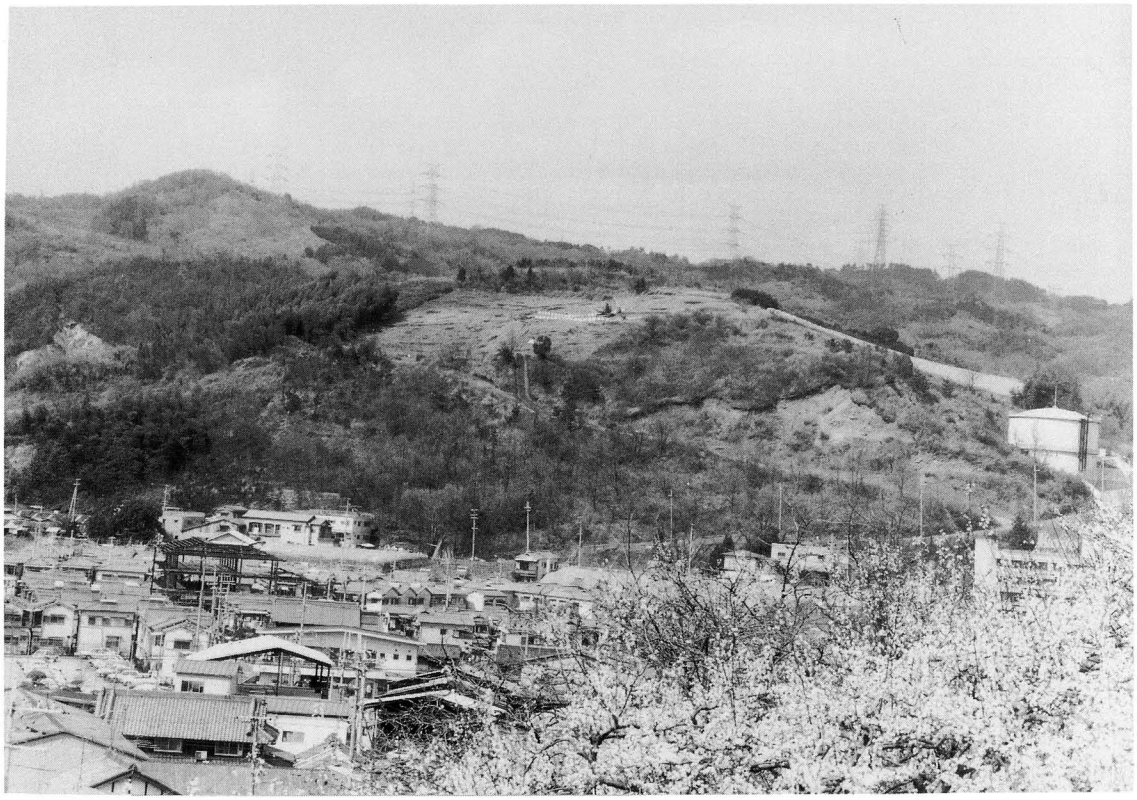
出土している。破片が多く、図示しえた遺物はわずかである。銅銭は第1層、土器類は第2層からの出土である。銅銭は寛永通宝で、裏面に「文」が鋳出されている。

北側道路をはさんだ西北隣接地に大池決潰の供養碑がある。昭和10年9月に調査地東の山中にある大池が決潰し、被害を受けたと刻まれている。北側水路からあふれ出た水により、調査地の状況が大きく改変されていると解するのが妥当であろうと判断された。



図—29　出土遺物

図　　版



調査地遠景（南から）

A１区（南西から）

A１区（東北から）

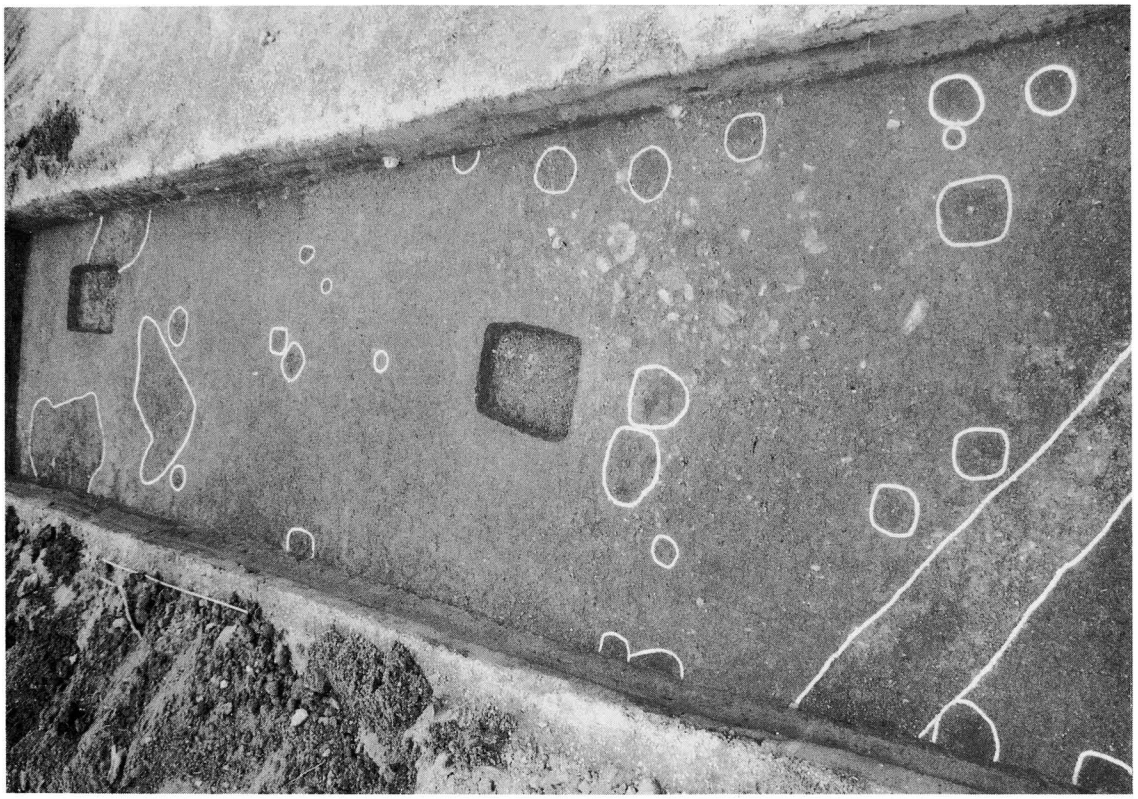
B１区（北から）

A２区中央　谷（北から）

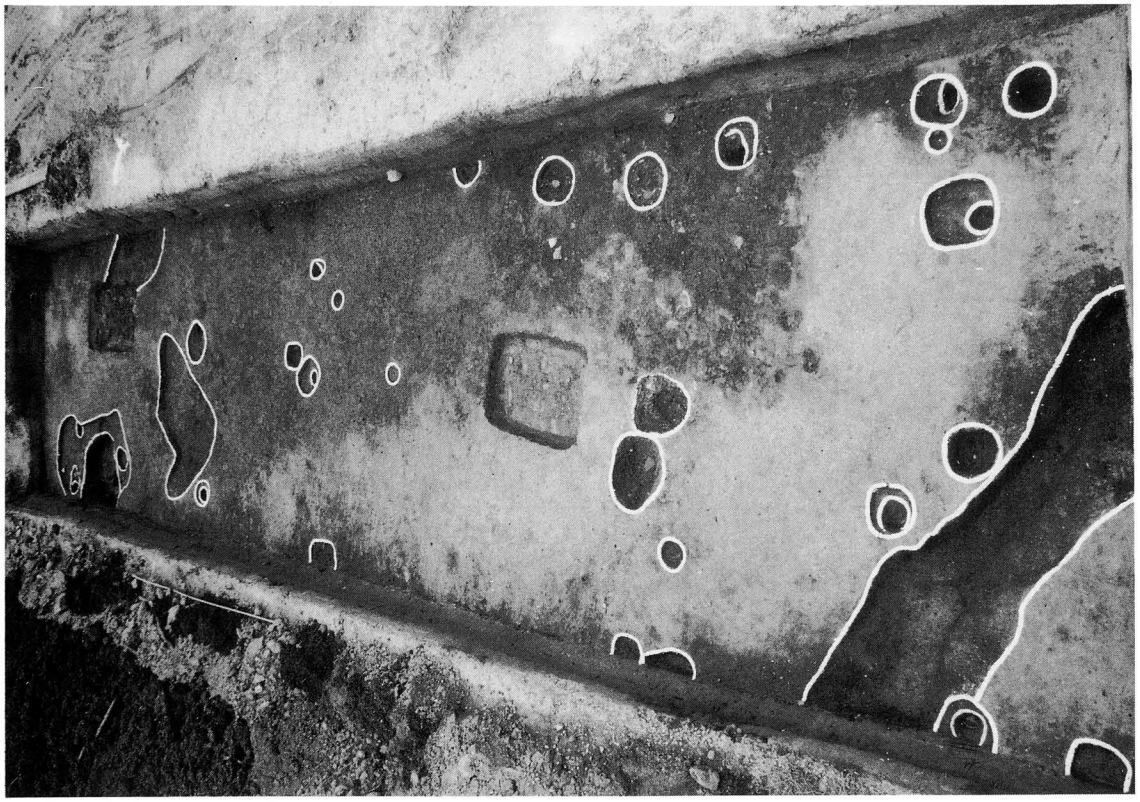
同　　（南から）

C１区（東南から）

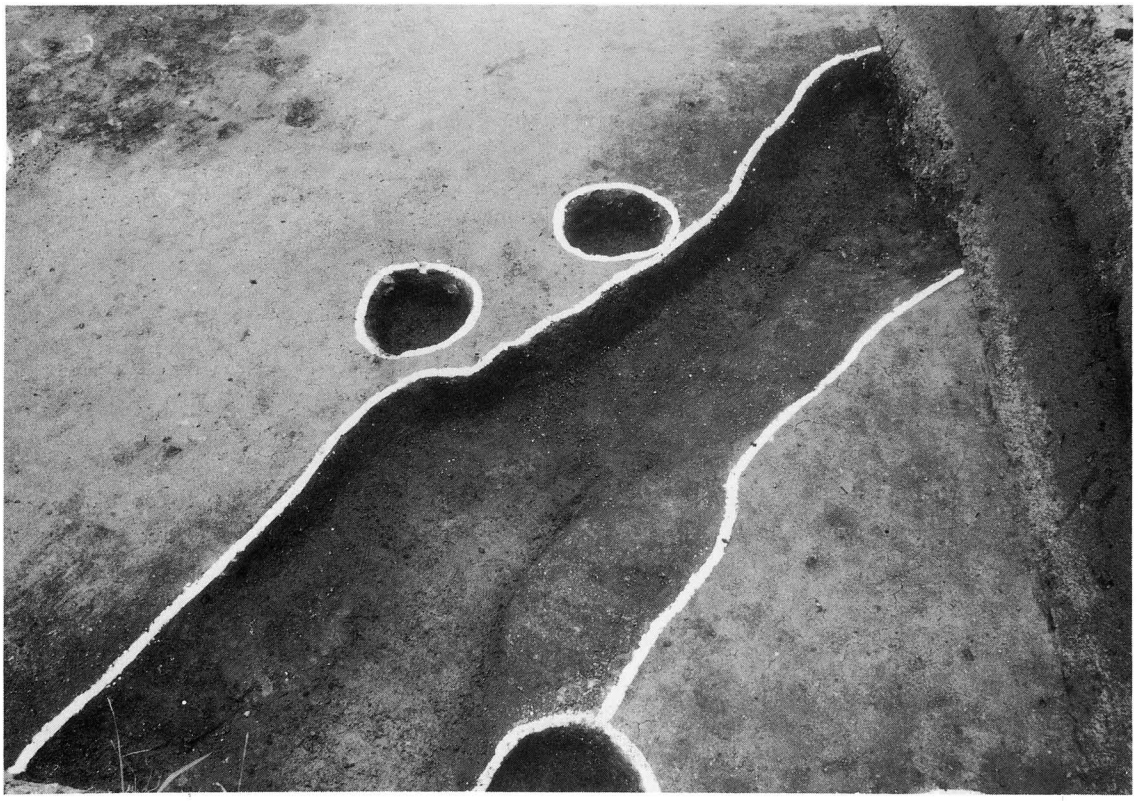
C２区（西から）



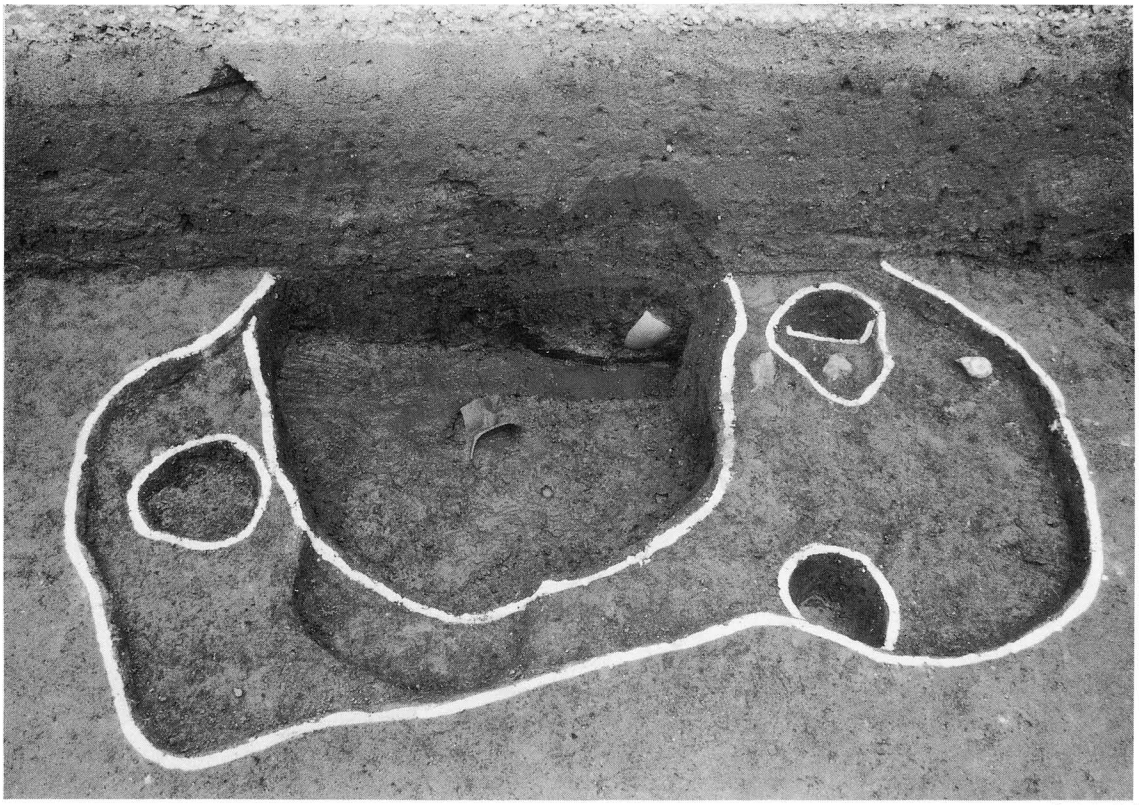
遺構検出面（北から）



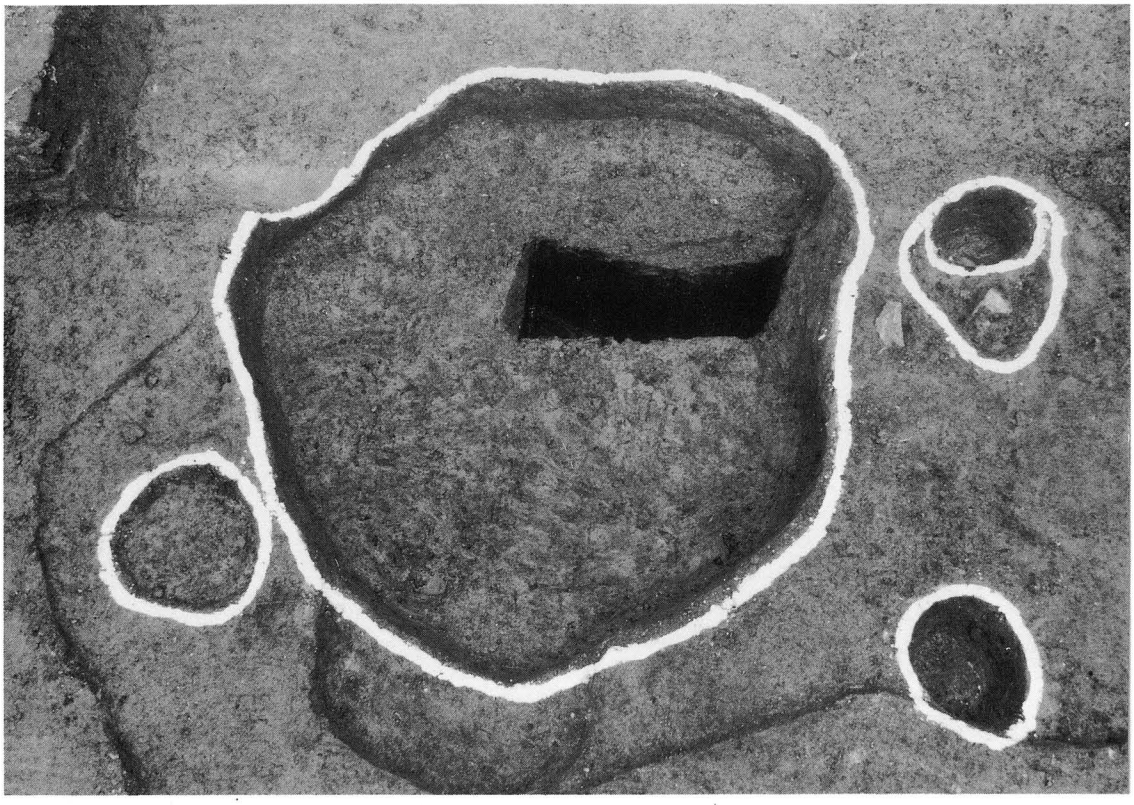
遺構掘削後（北から）



溝（東から）

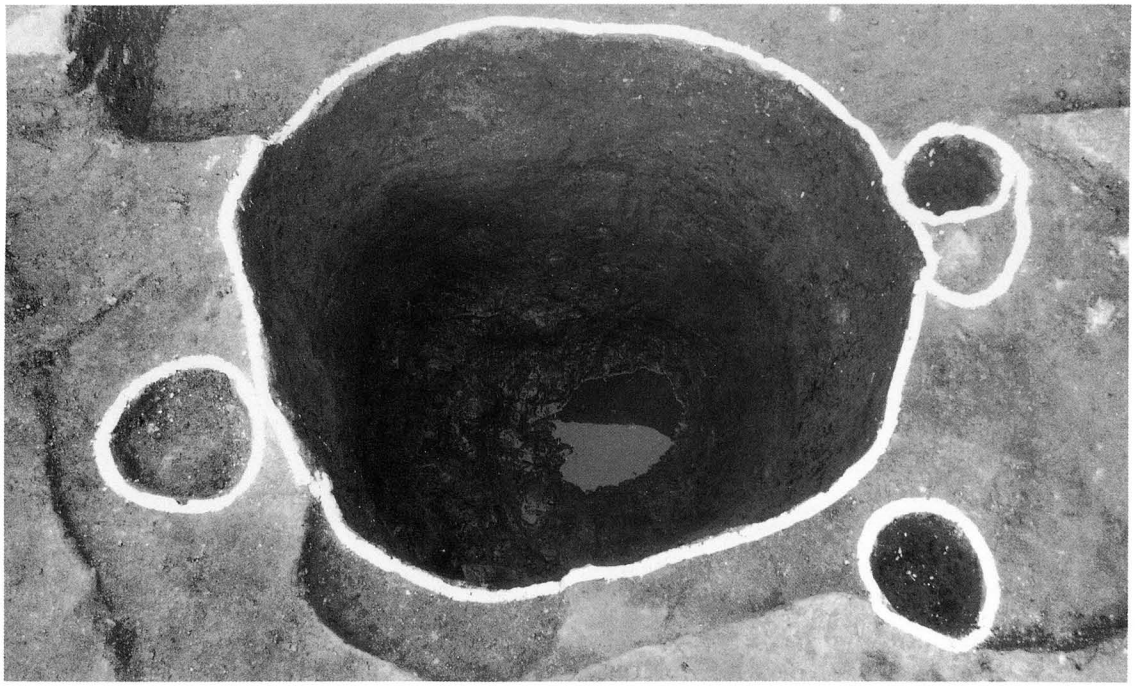


井戸検出時（西から）

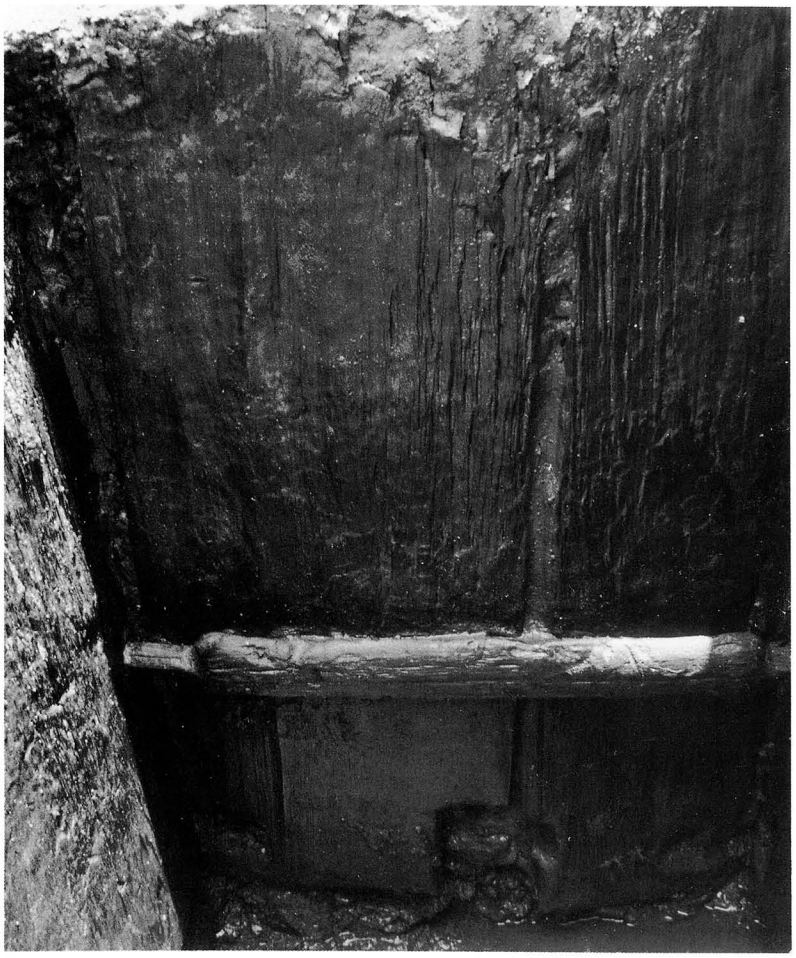


井戸（西から）

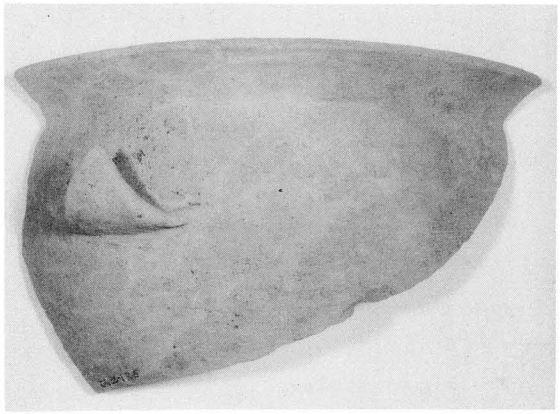
同　（同）

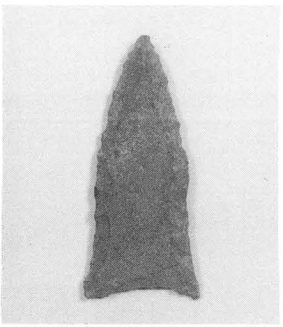
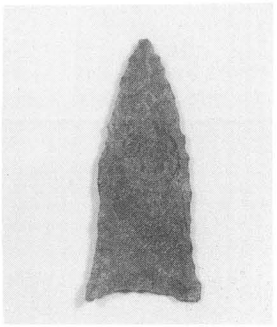


井戸完掘（西から）



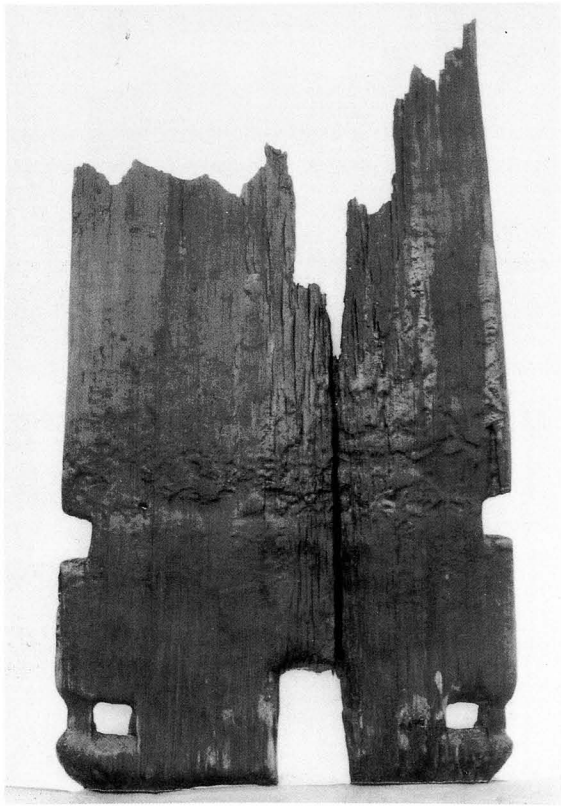
横桟検出状況（西から）

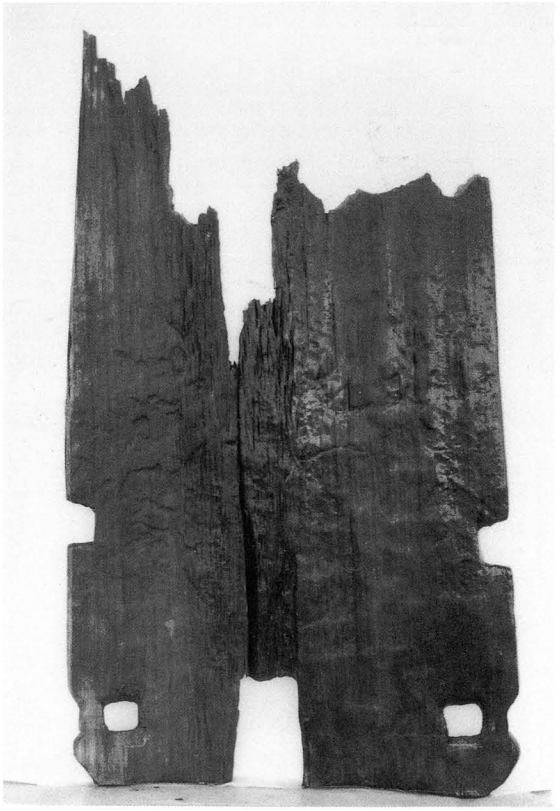


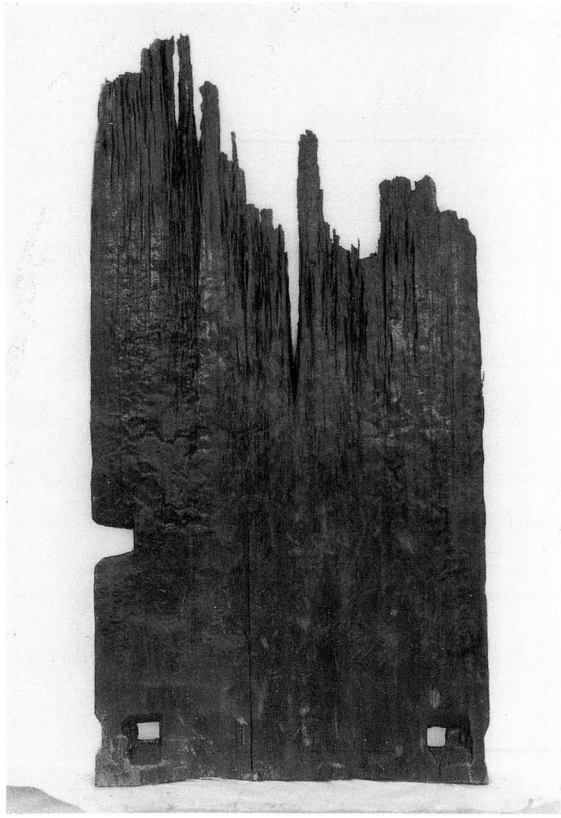



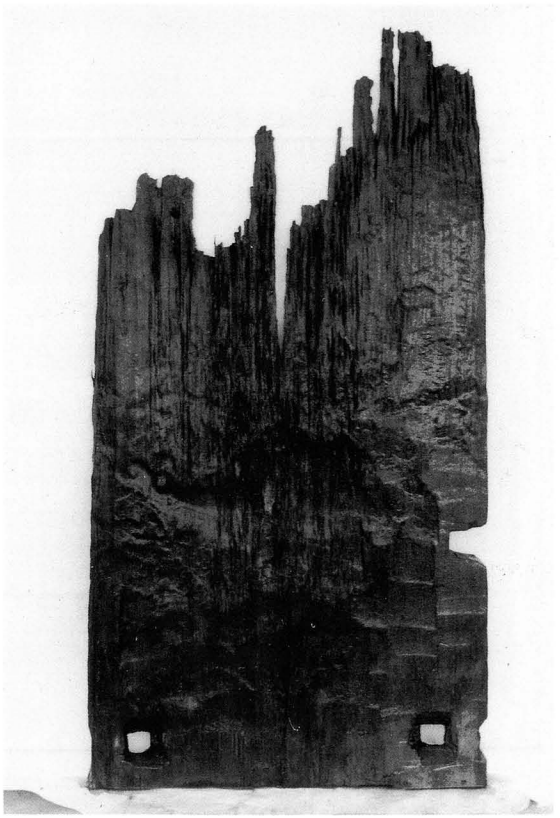
井門家

出土遺物

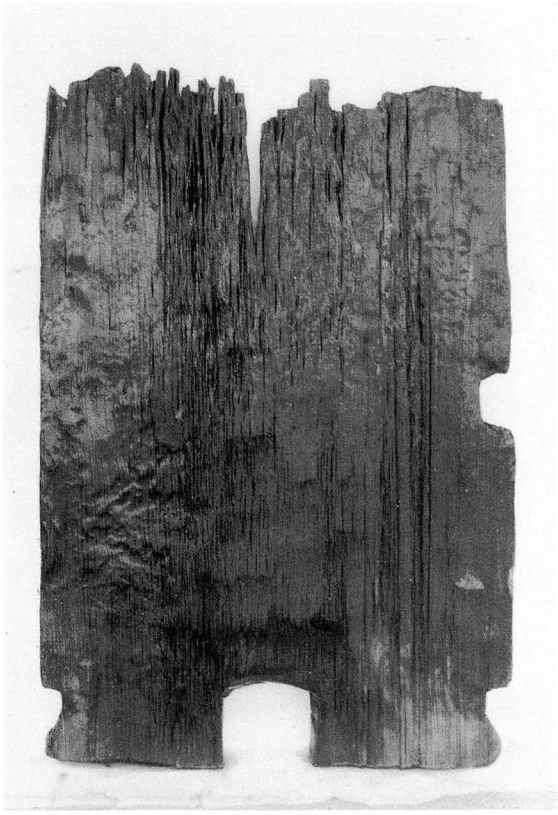






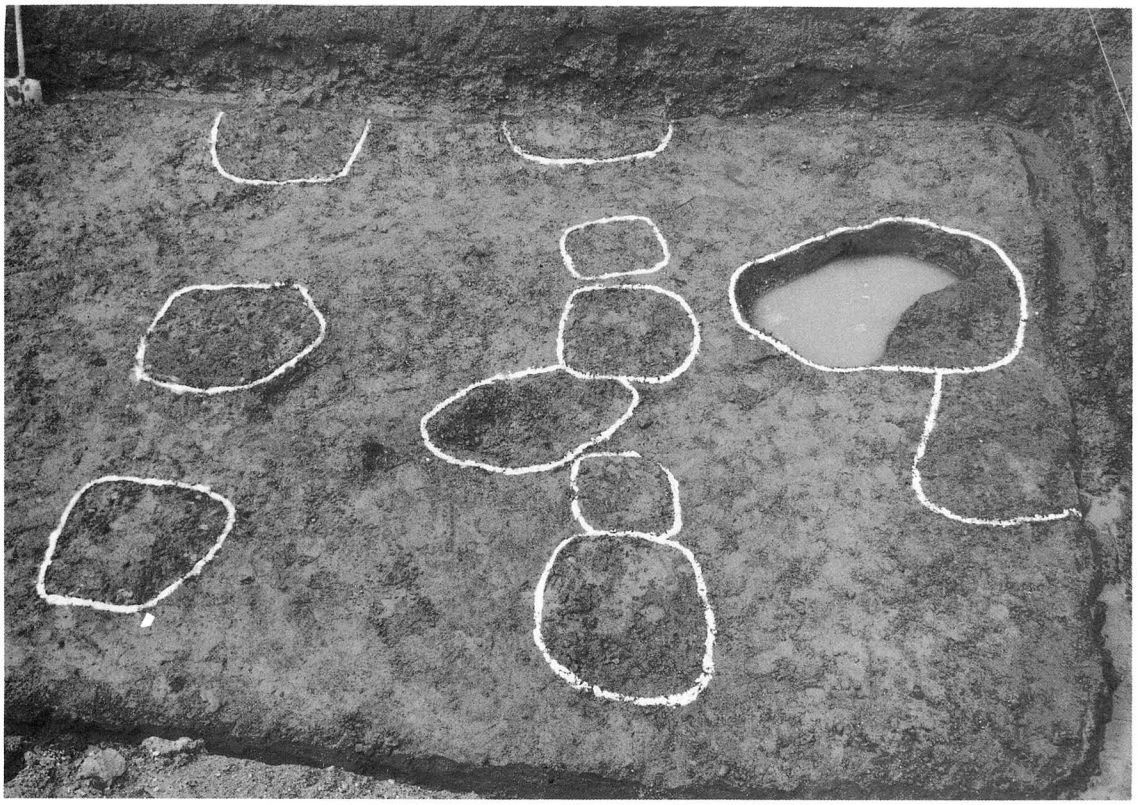


上：井戸枠１　下：井戸枠２

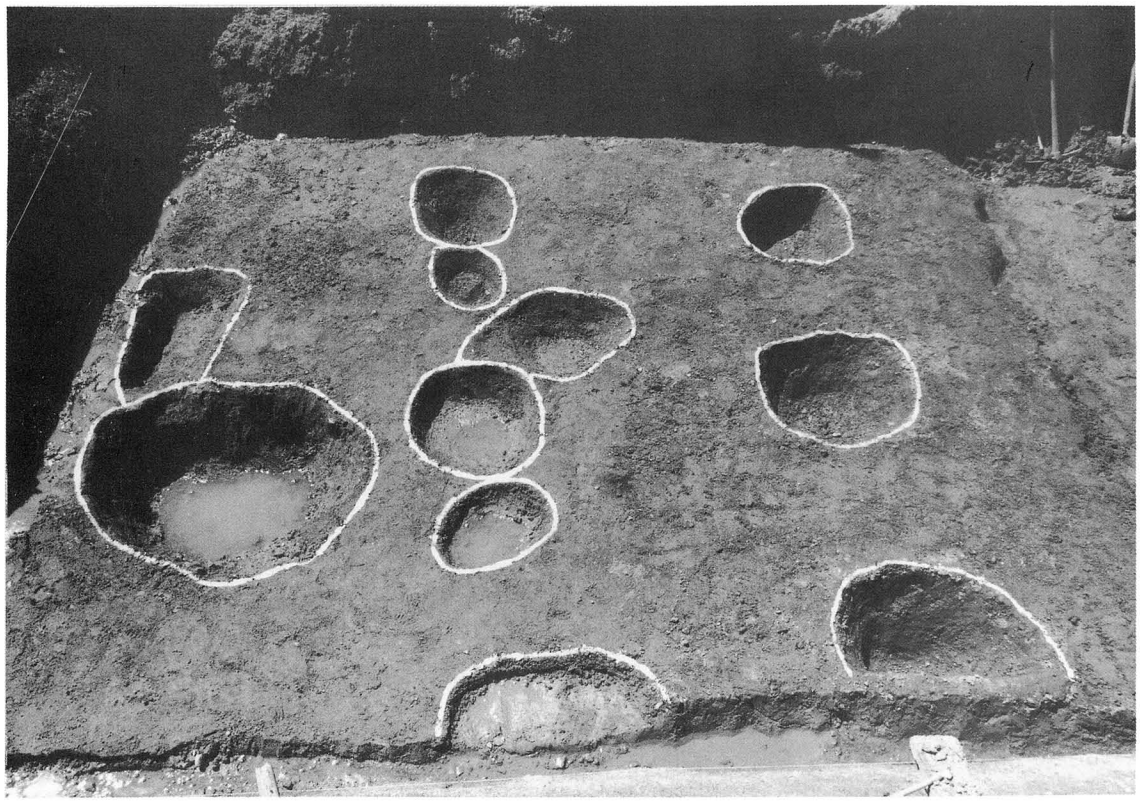


上：井戸枠3　下：井戸枠4

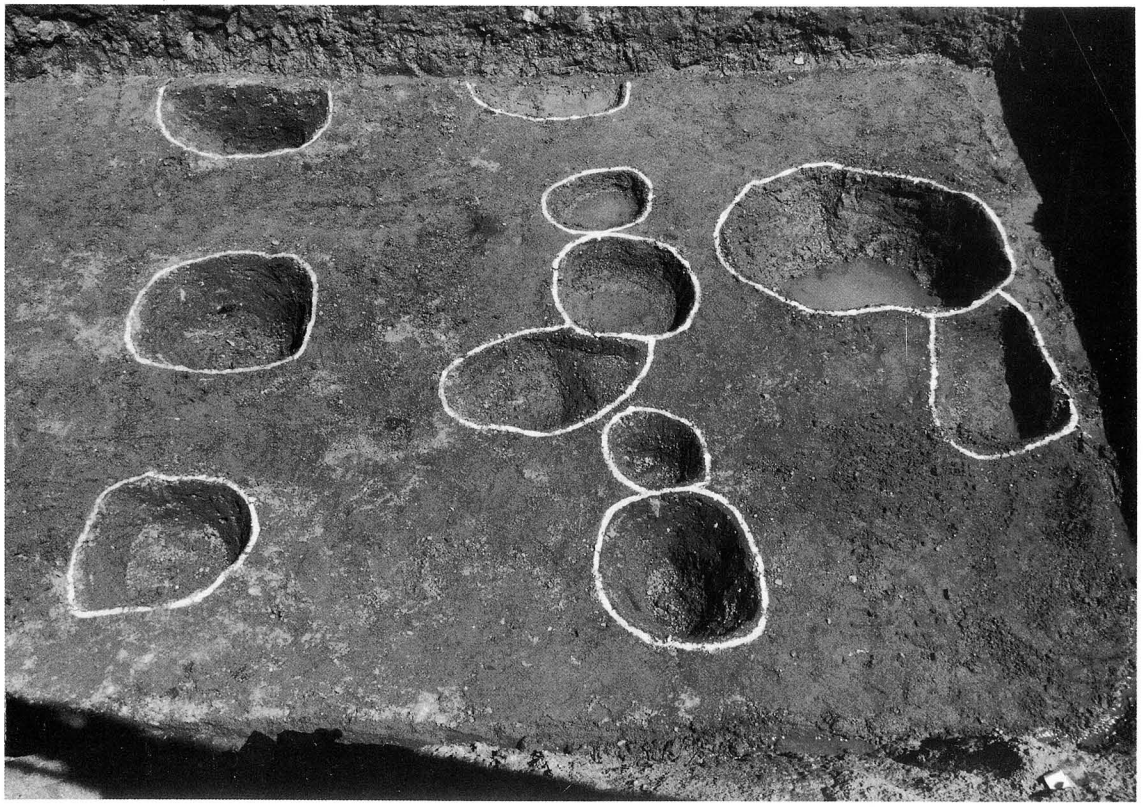
調査区東壁断面土層（西から）



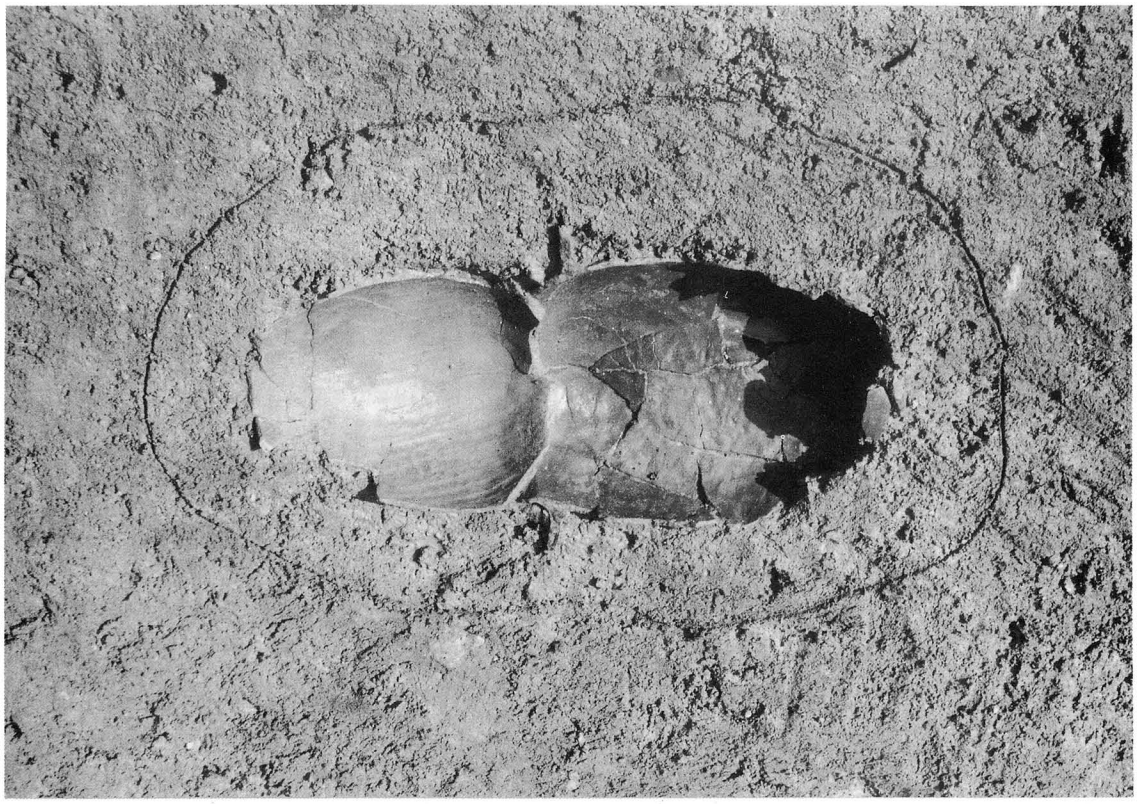
遺構検出面（南から）



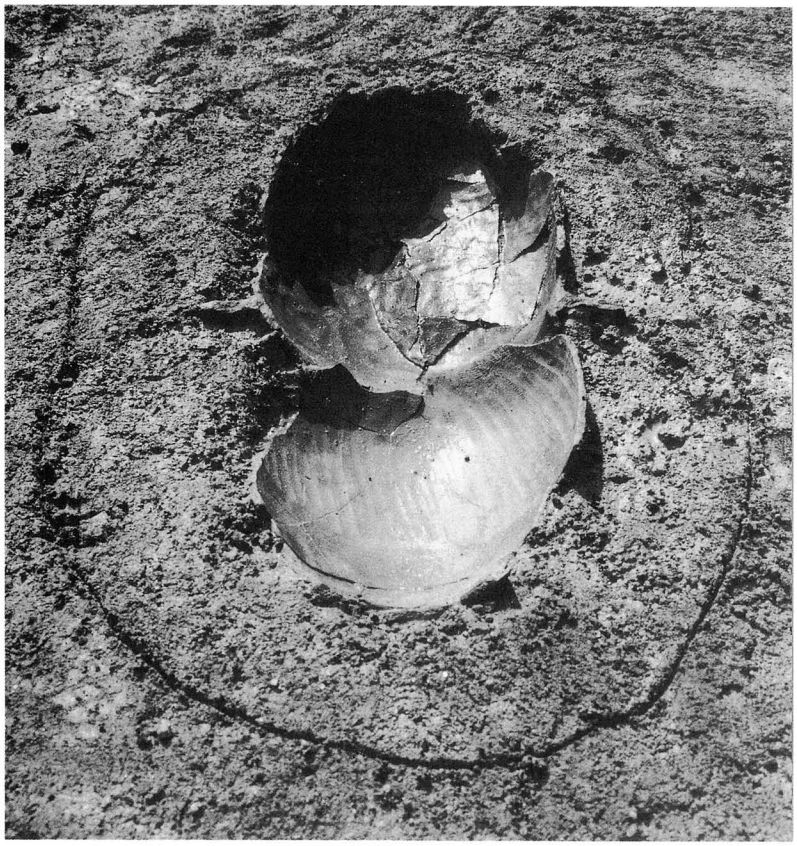
遺構掘削後（北から）



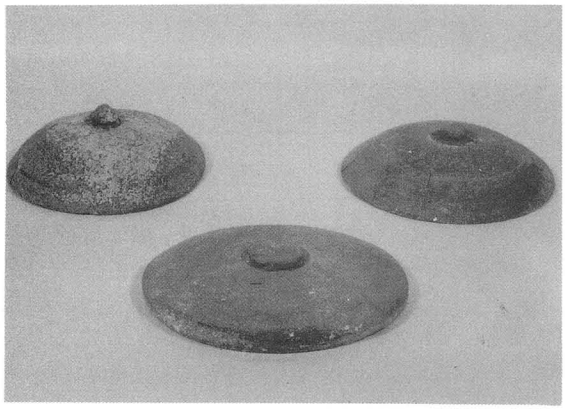
同　（南から）

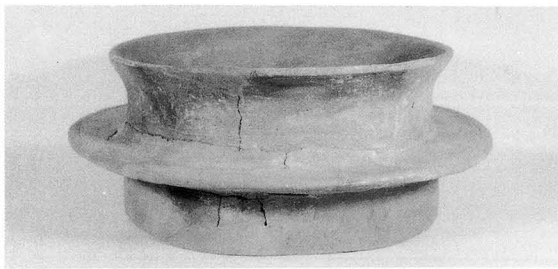


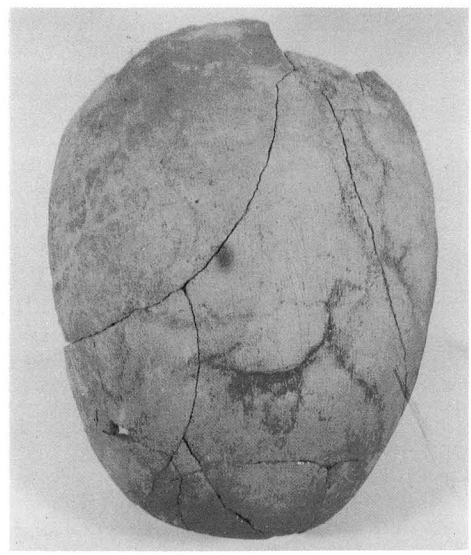
土器棺（北から）



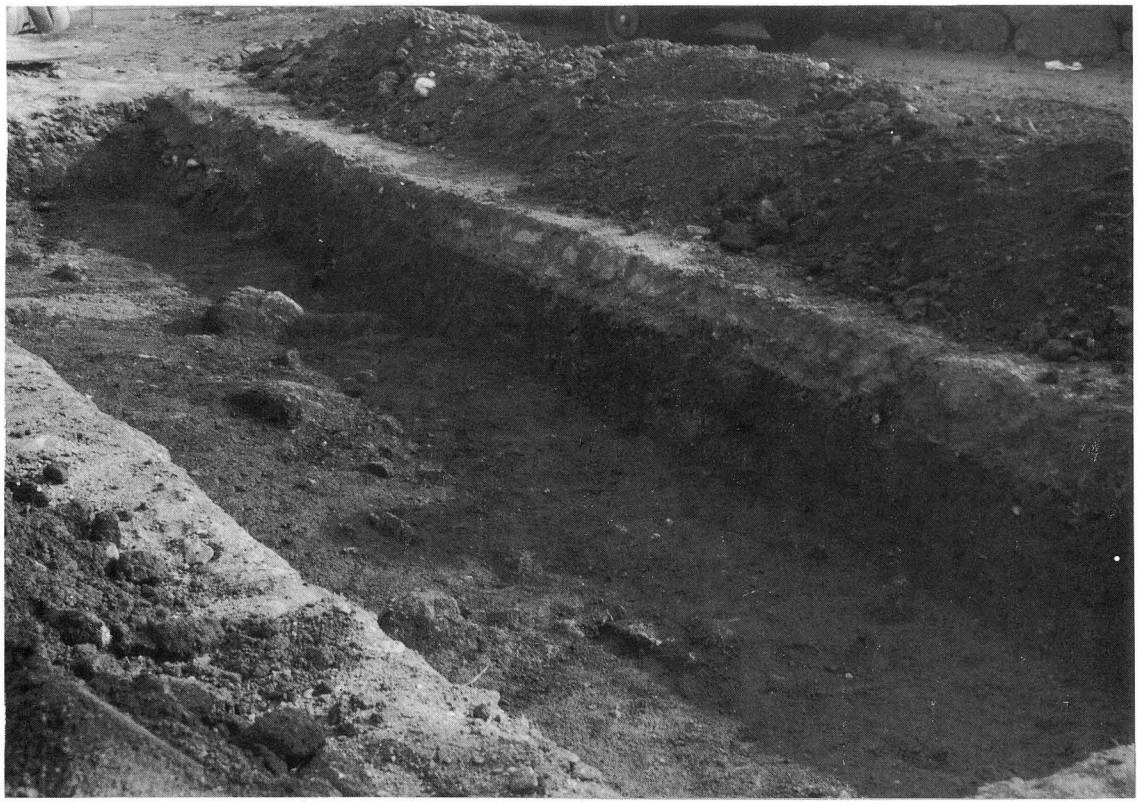
同　（東から）







出土遺物



2区調査区（西北から）

1区西壁断面土層（東から）

柏原市遺跡群発掘調査概報

1986年度

編集・発行　柏原市教育委員会
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号
電話（0729）72−1501　内 716

発行年月日　昭和62年3月31日

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所